



鹿旗之進著

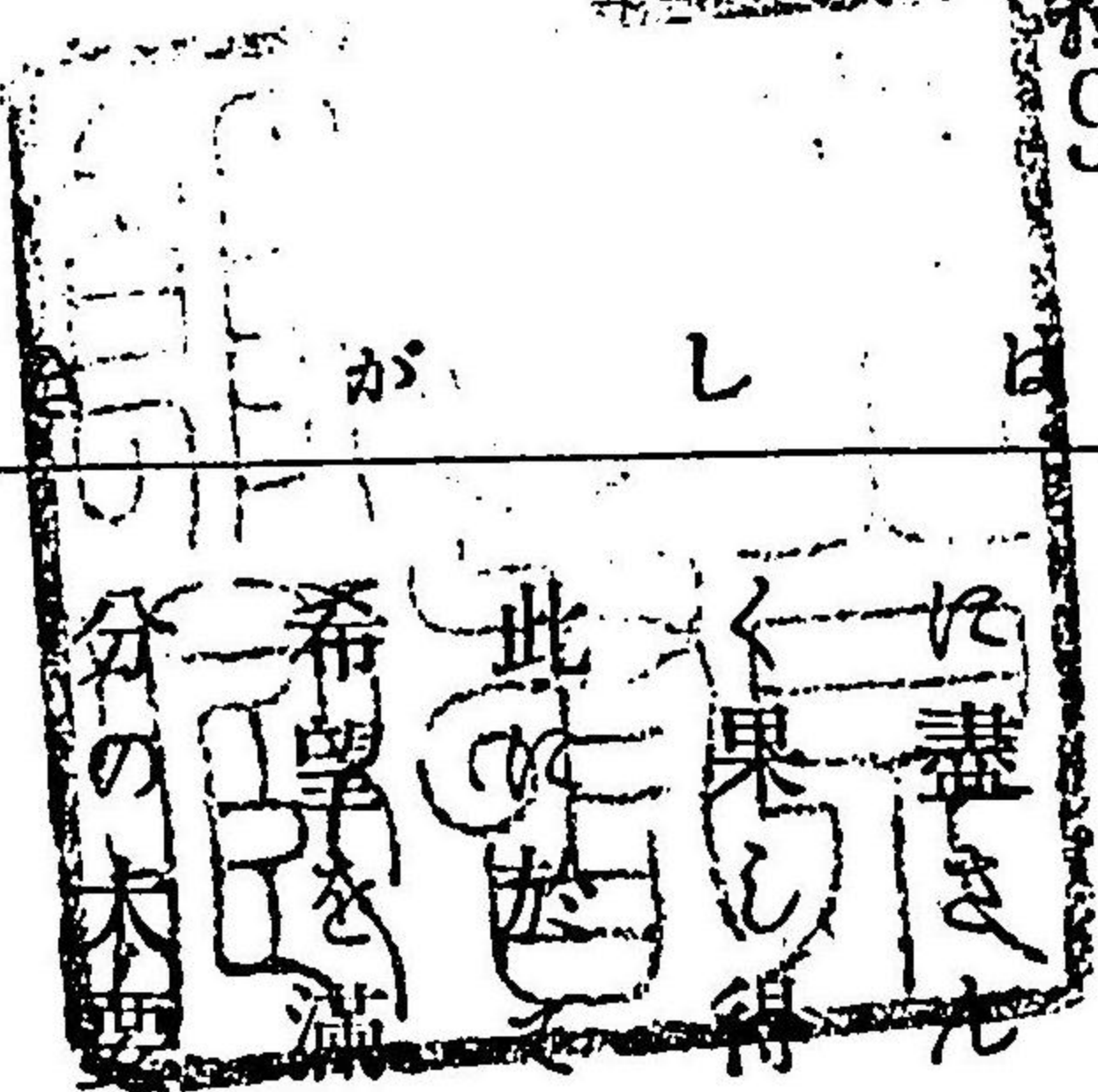
組長のつとめ

東京

教文館發行

特21  
983

1



はしがき

先き頃わが横濱教會の組長諸君が其職分

に盡きたがため予に請ふに如何にせば其つとめをよ

く果し得可きやこれが方法を聞かんことをもてせり

此のたゞ予の其精神に勵まされ予の及ぶたけ彼等の

希望を満さんものと思ひ或日組長等と會して其職

分の大事を講述せしことあり然れども斯る緊要ある

問題ハ固より一場の演説の盡しうべきにあらず又他

の教會にもおなじ精神を懐かるゝ組長諸君のおほか

『是故に爾曹常に行る如く互に慰め又おのゝの徳を相建つべし』

使徒パウロ

るを信じ乃ちこれを一小冊となして汎く同志に頒つ  
てどのかりぬ

引用書のマイレイ氏の『クラス、ミーナシグ』ワイズ氏の  
『エセントレー、ウホルカル』アツキンソン氏の『ゼ、クラス、  
リーダル』およびアバム氏の牧會神學其他内外の宗教  
新聞雜誌などよりこのかどなく抜きがきし置きた  
るものに過ぎず

此書は固より我メソヂスト教會を基礎として立論し  
つれど組長の職分にかゝる心得をどの廣く他のメ

ソヂスト派の教會にも應用しえらるべく其他書中に  
論せる事柄のうち聊かにても傳道者諸君の参考とも  
なることあらば著者の勞酬られて餘りあり

明治廿九年七月

横濱に於て

著者しるす

# 組長のつとめ

## 目次

第一章	メソジスト教會……………	一頁
第二章	組會の起原……………	九頁
第三章	組長……………	十六頁
第四章	組長の資格……………	二十三頁
第五章	組會の二性質……………	三十九頁
第六章	組會に對する反對論……………	五十三頁
第七章	組長の取扱ふ可き各種の信者其一……………	六十四頁
第八章	組長の取扱ふ可き各種の信者其二……………	七十八頁
第九章	組長訪問の心得および小兒の組……………	九十四頁

組長のつとめ

メソジスト教會

組會の起原

組長

組長の資格

組會の二性質

組會に對する反對論

組長の取扱ふ可き各種の信者其一

組長の取扱ふ可き各種の信者其二

組長訪問の心得および小兒の組

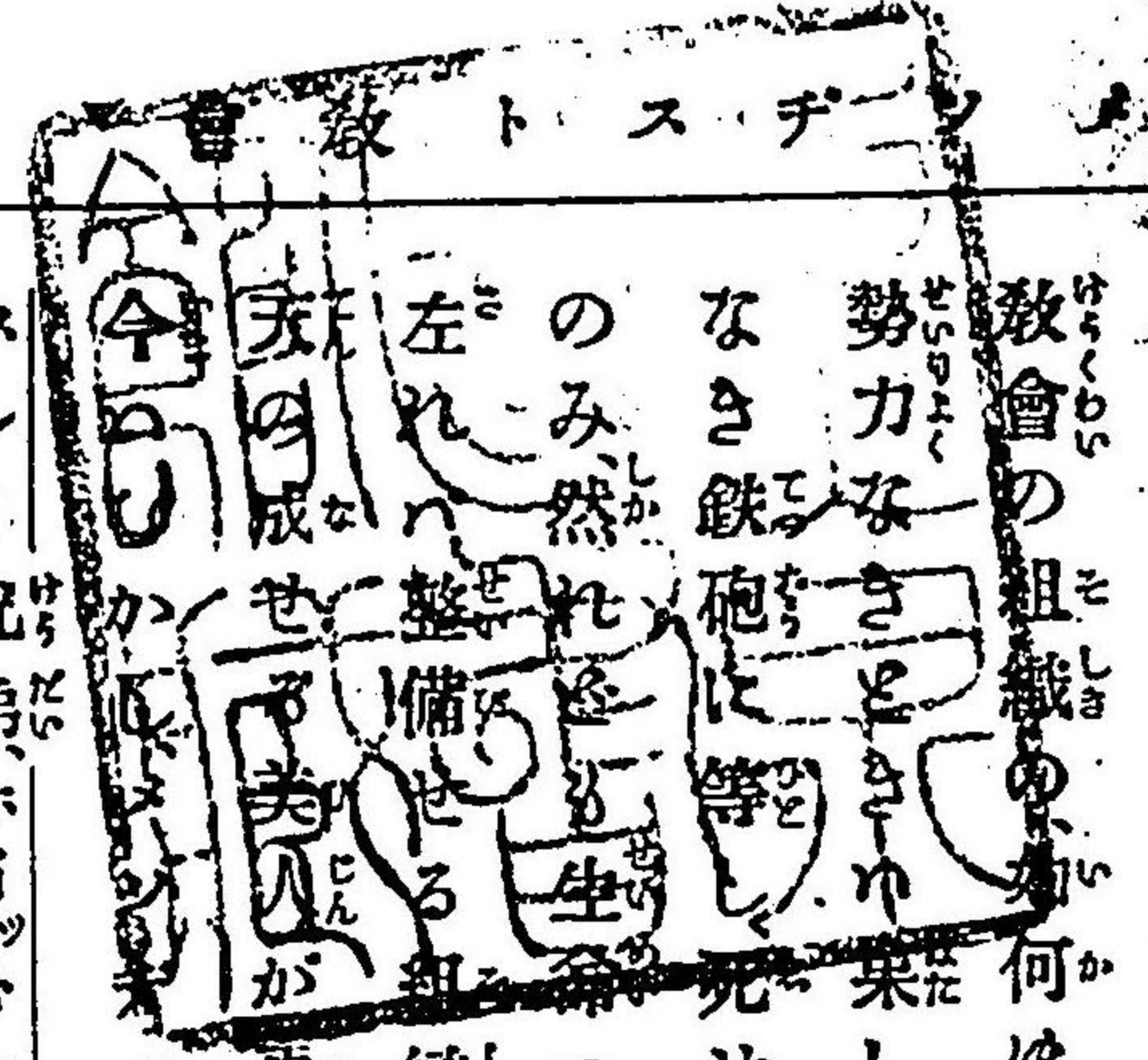
第十章 組會の妨礙……………百十三頁

第十一章 司會の方法……………百廿四頁

第十二章 牧師と組長……………百四十頁

### 組長のつとめ

#### 第一章 メソヂスト教會



教會の組織の如何は完全なればとて之を實際に活動せしむる所の  
 勢力なきと云ふ事果して如何ん是れ宛かも蒸汽なきの機關に等し彈丸  
 なき鉄砲に等し死せる美人のけいせするなり無用の長物といひまく  
 のみ然れども生命の組織のうちに存し蒸汽の機關を待て其用を成す  
 左の整備せる組織のうちに活潑なる生命の存して運動せる宛も  
 天の成せる美人が更らに思ひを凝らして盛粧せるが如けん、  
 今日かメソヂストと緋名せられたるオクスフォードの學生ウエ  
 スレー兄弟、ホイットフィールドなんど云へる輩が深く感ずる所ありて學  
 窓の下互に打寄り修徳建信を目的とせる熱心なる小集會を催せるこ

とありけるが、神の此集會に燃えあがりたる一點火を四方に散亂せしめ、之を以て十八世紀信仰復興の大火焰となし給ひ、久しく儀文の堅氷に閉込められたる信者の、春の如き新生命を得て奮ひ起り、不信の風に吹き荒らされたる教會の、猛然として秋の枯野を焚き拂ふが如くに燃え揚り、其火勢の激するや、大西洋をうち越えて米國に飛火し、創拓國の開けゆくと共に、到る所リ、バイバルの大火焰となり、其結果として今日の我メソヂスト教會を見るに、到れり、今やメソヂスト教會の歐洲の更らあり、印度に、亞弗利加に、日本に、支那に、朝鮮に、日進月歩、駁々として世界に傳播し、其火の手の熾んあること、何時また鎮まるべしとも見えず、恐らく其燒き盡す可き所をやき盡さでの消えざる可し、

左るにても、我メソヂスト教會の斯の如く盛大なるに、何によりて然る乎、其故なくしての適なる可し、蓋しメソヂスト教會の信奉する所の教

理の健全なるに、慥かに其原因たるに相違なかる可し、雖ども、教會全體の組織の完全なること、亦其一因たらざるならず、汽鐘に仕掛けたる熱湯の沸々どにえたり、機關の大車小車相接して、憂々と滑かに運轉し、其間些少の溢滞なきとさにて、如何なる大船巨艦と雖ども、逆捲く怒濤を乗り切りて進行させ得可し、我教會の監督の即ち監督にして、恰も船長の如し、四年に一度の總會の時、世界中の信者傳道者の信任擢舉によりて、教會全體の利害を管理し、保護し、又之を指圖するの役目を與へられたる者なり、故に彼等の年々其巡回する所の傳道地の年會の場所と時日を定めて、今年此世からなる極樂世界の如き、文明國に行くかと思へば、明年の鬼すむ亞弗利加に趣き、南船北馬海を涉り、山を跋え、我が家のわれどもなきが如く、其席あたるとまるの暇あらず、勿論監督に推さるゝ程の者の、平凡の人物にあらざるに明かなれども、左りて人

間の即ち人間なり、監督として七面八臂のあるにもあらねば、其人數として僅かに十八名に過ぎず、其内二名の宣教監督として、専ら一地方を引受くる者あり、然れば監督の船全體の掛引きころ指圖もすれ、機關の小部大車小車の管理人の別に相應の人ありて、銘々其受け持ちを定めて働かざる可らず、左れば監督の行く先さきさきに長老司と云へる管理者ありて、年會地を更らに幾つかに連回と云へるものに區分して之を統轄す、而して監督の年會議の時、おほかた此長老司の意見を叩きて、傳道者の任地を撰定し、大抵の事務を所決す、蓋し長老司の監督の眼なり、手なり、又足なり、否な小監督なり、左れば或意味に於て、我教會を稱してメソヂスト監督教會と云ふんより、寧ろメソヂスト長老司教會と云ふんかた適當なる可し、是によりても長老司其人を得ると然らざるとによりて、教會總體の盛衰に掛からぬ關係あるを知る可し

斯くまで長老司の我教會に必要ある各連回の長老司の下に、各教會の牧師ありて、彼れと是れとの密接の關係あるを以てなり、故に如何はと長老司其人を得たりとて、連回内諸教會の牧師にして十分働かざる時の傳道の事業決して擧ることなし、長老司の連回總體を管理すれども、直接箇々の教會を統轄するの牧師の任なり、我メソヂスト教會が一つの特色とする所の傳道者の巡回法にあり、若し強て我教會に短所ありとせば、其短所もまた此巡回法にある可きも、今日我國の如き、比較的の不準備なる少數の傳道者を利用して大に進撃的傳道を試んと欲せば、是非とも此巡回法に據らざる可らず、蓋し巡回法の傳道者に勇氣を生せしめ、教會に活氣を興ふ、牧師も自己の地位を失ふんことを氣づかいて云ふ可きことを躊躇することなく、定住無期限にあらざれば、安心して不活潑に流るゝ憂ひもなし、毎年任地を定

ひることなれば都合によりて一年にて轉するも、教會と牧師と雙方  
 うつくしく交迭しく其間更らに爭論がまじきことなく、又長くとも五  
 年より繼續し得ざるとなれば、一牧師の偏癖が教會に染み込むの心配  
 もあし、また人材を永く一教會に私せず、年々巡回轉任して諸教會に變  
 化を興ふべし、此變化こそ實に我メソヂスト教會の活氣の生ずる所、ま  
 た生命の存する所なれば、  
 然れども傳道の秘訣、人を知るに在り、人を見されぬ法を説きがたく、  
 病を察せざれば藥の投じやうもなし、左れば牧師の巡回傳道法より  
 て一教會を牧するの長きも五年に過ぎず、短かき一年を越えず、牧師  
 お如何ほどの觀識あればとて、赴任早々教會の模様會友の有様を判知  
 しえらる可くもあらず、我が少數の友達すら互に相知るに到りしまで  
 に、多少の年月を經過せしものを争かて何十何百と云ふ教會員の信

仰の有様教會の事情なを俄かに知りつくすことをえんや、  
 此に於て乎、我教會に組長の必要あり、抑も組長の牧師の撰任する所  
 にして、教會員總體を更らに小團隊に區別し、之をバ組と稱し、毎週一度  
 其組員を便宜の所に集めて、組會と云へるものを催し、此にて具さに會  
 友各自の信仰の有様を承知し、四季會の時の勿論、牧師の諮問會とも見  
 る可き長吏會に於て細かに會友の有様を告げ、尙ほ亦其外の時にも屢  
 次牧師に面會して自由に相談す、是れ組長の義務なり、此を以て牧師の  
 交迭の頻繁なるも、組長の職任の無期限なれば、教會の根底の依然とし  
 て更らにゆるぐことなし、即ち轉任牧師の其日尙ほ淺きも、萬事之を組  
 長に問合せ、教會の事情の宛がら掌を指すが如くなるべく、隨つて新  
 教會を牧するも尙ほ大過なきを得べし、左れば我メソヂスト教會に  
 監督なかる可らざる如く、監督の下に長老司なかる可らず、而して長老



司の下にの教師なかる可らざる如く、教師の下にの是非とも組長か  
る可らず、  
蓋し監督長老司、牧師、組長の四者のメンヂスト、教會組織の要素にして、  
假令組長の職位の左ほかに重からざるが如くに見ゆ可けれども、之を  
缺くときはに最早や完備したる機關にあらざれば、蒸汽の皆この少なき裂  
罅より漏洩して、活氣なきの教會となり終る可し、

### 第二章 組會の起元

教會の歴史によりて、組會の權興を尋ぬるに、其初めの會員より僅かづ  
くの金錢を取立て、傳道事業の負債を償却するにありたり、然るも其  
頃罪を悔改めて、信者となれる者の數漸く増加し、此人々の互に注意し  
て、徳を脩め、信を堅むるやうつとむるものゝ、如何にせん、數多の中に、  
人知れず、誘惑に落ち入りて、罪を犯かす者あきにあらず、然れども直ち  
に之を取り締りやうもなく、信者の廣く各所に散在することなれば、箇  
人の獨力にて之を査察することもかなはず、ウエスレーも之が所置に  
はほどく、困じ果てたり、然るに或日のことに、ウエスレーのブリスト  
ルと云へる所にて、信者を集めて共に、負債償却の相談をなしたり、時に  
一人の信者あり、起立して曰く、『會の各員をして負債を償却するまで、  
毎週一ペニーづつを義捐せしめよ』と、言下に他の一人答て曰く、『我

等の多數の貧困にして、其を克く果しえざるを如何せん』と然るに前  
 きの一人再び去り、「よし然らば、我に最も貧困なる者十一人を預づ  
 けられよ、われは彼等を毎週訪問す可し、彼の人々の幾分にては義捐し  
 得ればよし、若し彼等の力足らずば、我のわが分に加へて、彼の人々の分  
 をも出金す可し、各諸君にも亦毎週其近隣の者十一人を訪問し、彼等の  
 出す金を受取り、而して其足らざる所は之を補われよ』と此に於て相  
 談一決、たちまち其方案の實行せられぬ、然るに幾程もなく其十一人づ  
 くの組長の或る者の、其組員のうちにて信者たる不應しからぬ不行跡  
 の者あるを見出したれば、直ちに其由をウエズレーに告げたり、ウエズ  
 レー其時云く、『左ればよ、此事なり、是れ予我が久しく望みたりし  
 所のものなり』とて、乃ち總ての組長を呼び集めて、彼等の毎週組員  
 を訪問する時に、克く其信仰の有様行跡の如何んをも注意せんこと

を懇ろに依頼しければ、彼等いづれも唯々として其の如くなしぬ、斯く  
 て此良方案の、獨りブリストルの一地方のみならず、ロンドン其他の處  
 にも廣く行はるゝに至りければ、偶々不行跡のもの組長直ちに之を  
 發見し、或は諫めて悔改せしめ、或は餘義なく除名したるもありたり、而  
 して除名者のために、太たく悲しみ祈禱したれども、亦此等少數の悪  
 しき者のために、他の會員一同の面目を汚されざることをよるこびた  
 り、  
 是れ予今日我教會に存する組會なるもの、直接なる起元にはあれど  
 も、之が遠因の即ち尙ほ他にありて存せり、其のノルスマンブトンに在  
 りける宗教上の會合にて、此會の一定の規則を設け、聖書の研究、祈禱、お  
 よび互の訓誨等を目的とせるものなり、而して之が司會をなす者の教  
 師ありき、監督グリンダ、監督バルクハルスト、および其他の監督、大

に之を賛成したれども女王エリザベツの禁制せり(千五百五十七年五月七日)然れども此會の尙は諸所に引き續きて行われたりしが、ウエルトギフト(千五百八十三年)カンタルバレーの大監督となれる人の激烈なる手段によりて、全く撲滅せらるゝに至れり、マルスデン此會合を評して曰く、『ウエスレーの此等の會合によりて、彼の普通の信者が其牧師の指導の下に在りとの云ひながら、主として普通信者のみ參與するところの社交的會合即ちメソヂズムの勢力の依て以て保存する所のもの』を思ひ付きしならん、

是よりも尙は一層組會に似寄りしもの、十七世紀の末頃、廣く英國教會に流行せし所の宗教會と云へるものなり、抑も此會の起元と云へるの、ウドウオールドの書によれば、千六百六十六年の頃にやありけん、ロンドンある數多の青年輩の、教師の説教に深く己等の罪惡を悔悟しけれ

は、毎週一回、教師の出席を乞ひて、其教訓を聞き、互に徳を建て、道に進まんことを企圖したりき、而して此會の幾程もなく各地に蔓延し、遂に千六百七十八年に、此宗教會の司會規則を採用するほどの盛大に趣けり、ホルネツク、ベウエレンツデ、ステリソングフレート、チロトソン、かゝる此會の發達進歩に與りて力ある者ありき、博士クラークは、サミエル、ウエスレーより、此宗教會に就きて(千六百九十九年)博士に寄せたる書翰を記し、書中ウエスレーの意見として、此會の英國教會が、兄弟的懇親の情に缺けたるを補ふものありとし、其目的および之が方法等を大に賛成したり、

同じ頃、日耳曼にて、スペンナルと云へる人、太たく路得教會の腐敗を慨嘆し、『コレチア、バイタチス』と云へる宗教會を發企したり、此會の目的および方法等、我メソヂスト教會の組會とよく似たりたるものな

りし、  
 又天主教會にて我組會に最もよく似よりたるもの、「ソサイチイ、ラ  
 プ、セント、ウインセント、デ、パウロ」なる可し、此會の目的も亦定時に會  
 員の集合して、道德慈善を奨励し、且つ之を實行するにありたり、  
 コーク及びムーア兩氏のウエスレー傳記に據るに、ウエスレーが四方  
 に週遊して、其巡回傳道を初むるに當りてや、『宗教會』の「双手をわけ  
 てウエスレーを歓迎したり」とあり、然ればウエスレーは社交的基督  
 教即ち組會の如きものを、此等の宗教會より思ひ付きしと思惟するも、  
 強がら無根の推測にあらざる可し、  
 餘事の借て措き、ウエスレーが最初お設けたる組會の方法にて、組長  
 たる者其組の家々を別々に訪問し、特に靈魂の救済につきて教導を受  
 けんと欲する個人に面接するにありしが、斯くての餘りに時間も費え

且つ不便にして煩累に堪えざりければ、後らにの時と所とを定めて、  
 其所に組員一同を集め、集會を催すことゝなれり、  
 此の如く組會の起元は偶然の事より出で、其初めの只集金の目的な  
 りしが、後らにの集金に加へて、信者の信仰を監督視察するの集會とな  
 なれり、總てメソヂスト教會の組織の、攝理の指導に遵ひ、必要によりて  
 起れるものなるを以て、其の今日ある亦故なきあらざるなり、

第三章 組長

ウエスレーが組會を設けたるの主意の、數多の信者を渡れなく管理せんがためなり、一人の教師にて數百人を監督し、よく各個人の信仰上の有様を知るの難事なれば、組長を擧げ組會を設けたるなり、故にウエスレー嘗て組長に依頼して其會員の様子を、書翰を以ても報告せしめたることあり、

我教會にては長老司は、副監督なるが如く、組長の副教師なり、監督コングレガ、および監督アスベレイは、千七百七十七年の教會條例の解釋のうち、「各組長は或度に於て福音の役者なり」と云へり、又千八百六十年の總會に於て、監督の演説をたると、組長の職務を指して副教師なりとも云へり、然れど組長の管に組員全體を包括して管理するのみならず、其會員銘々をも守護せざる可らず、斯くて何時にても必要なる場

合に、牧師の尋問に應じて會員の信仰の有様、生活の模様など委しく告知せざる可らず、組員のうち偶々道をふみあやまる者ある時に、直ちに之に諫言す可し、而して尙ほうを聴かざるに、相當の處置を爲し、以て一會員の不行跡の爲め、自餘の會員全體に迷惑のかゝらぬやう取計ふ可し、

前にも云ひし如く、牧師の一教會に傳道するの任期は、毎年々會に於て之を定め長くも五年より繼續す可らざる規則なれば、牧師の多分の時に於て、比較的、不案内なるが故に、組長の委しく之を牧師に告げざる可らず、組長の其管理する所の人員少なければ、査察の届行かざる愛ひなく、又其職務に年限なければ、長く同一の人と往來して之を熟知するの機會あり、故に何れの教會にても、組長にして忠實に其職分を盡したらんに、或る教會の如く、牧師の交迭と共に、將に教會までも瓦解せんと

し、之が爲め新任牧師の更らに新教會を建設せざるべからざる如き事情に迫らるることなかる可し、組長の定時の組會に於て、其組員と面會するのみならず、折ふしに彼等と往來して其居常の職業、行跡、性質、および氣合ひなどを克く心得居りて、其人の情況に隨ひ、慰藉もし、獎勵もし、又勸告もせざる可らず、

如何に牧師が毎安息日に熱心に説教するとも、其教會に忠實なる組長なきときは、唯だ公けなる講壇教育のみにて、信者各個人の宗教上の生活を持續し、教會の清潔を保存しゆくこと甚だ覺束なし、忠實なる組長なしに唯だ教會の條例のみにて、會員の取締の行届可きやうなし、ウエスレー嘗て、ダブリンの會の情況を查察せる時、組長を集めて、彼等が職務の性質につき、左の文を朗讀したることあり、曰く、

一、我が會の會員が各自の救済を全ふせんことをつとめつゝある

や否やを、一層容易に識別し得んがために、彼等を小群に區分し、之を組と云ひ、各組の一人を推して長となし、稱して之を組長といふ、而して組長の職の即ち、

一、一週一次、其組の各會員に面會し、左の事をつとむ可し、(一)會員の靈魂の如何か榮かゆくかを尋ね、之を勧め、或は諫め、あるひに慰め、あるひに勵すこと、(二)會の費用のため、彼等の出金を受取ること、(三)一週一次、補助傳道者(ウエスレーの下に在りて働く主任傳道者を云ふ)及び會計に面會すること、

二、是れ一組長若しくは數組長の執行す可き唯一の職務なりと雖も、補助傳道者たる者の何地に於ても、數多の組長の集會せし時、亦、會の俗務あるひに心靈上の情況につきても、組長等の意見を叩く可し、尤も傳道者が最善と見做す所にしたるがひ、之を採用する

と否との彼の自由に任す可し、然れども、我の大なる會に於ては、屢次之を實行したり、而して多くの場合に於て協議者の大數なる時に、隨てうれだけ其意見にも危険のあらざることを發見せり、  
三、此の組長を設けたる本來の目的よりして、次ぎの問題に答ふる  
こと難からず、

(一) 單一の組長に如何なる職權ありや、  
彼の其組を會合し、會員の出金を受取り、又其組の病者を訪問するの權あり、

(二) 會の總ての組長の集會せし時に、如何なる職權ありや、  
彼等の補助傳道者に其組會記録を示し、會計に其受取りたる金錢を渡し、而して病者の姓名を報告すること、

(三) 總ての組長は若し補助傳道者に不穩當の所爲ありと思考する

時は、彼を制止するの權なきや、

會の通常會員が有するもの、外に別に權あることなし、彼等の穩かお傳道者に勸告せし後、其次第をウエスレーに通告す可し、

(四) 總ての組長の人の説教を差止むる權ありや、  
補助傳道者の外何人も此權あるなし、

(五) 總ての組長の特別なる一組長を免職するの權なき乎、  
宛も門番に其權なきが如く、何人も之あるなし、組長を任免するの權の補助傳道者獨り之を有す、

(六) 組長の會の特別なる會員を放逐するの權なき乎、  
否、補助傳道者のみ獨り之をよくす、

(七) 組長の會の俗務および靈性上の事を整理するの權なき乎、

否な兩者孰れをも支配するの權なし、會の俗務の會計に屬し、靈性上の事柄の傳道者に屬す。

思ふに日本の傳道の早晚、全く日本人之を負擔す可きに至當の事にし、て予輩の唯今の時機の一日も速かならんことを祈念するものなり、而して一朝の時機到來するときに、到底今日の如く多數の少給傳道者と、小數信徒の多數教會との永續の覺束なからん、此を以て現在の組織の大に革まり一人の傳道者にして、二三の教會を受け持つに至る可きや、計りがたし、斯らん時に、牧師の一教會あて、毎安息日に説教し能はずと雖ども、人望と經驗に富みたる相當の組長ありて、牧師の下に立ち、其組長たるの職務を忠實に行ひ、假令一人の專任牧師なきも、差程に大なる不都合を感せず、教會の管理意外に行届くことある可し。

第四章 組長の資格

「クラス、リーダー」譯して之を組長を云ふ、蓋し「クラス」とい組の意にして、「リーダー」とい嚮導者の義なり、左れば組長の字義の如くに、其組を導かざる可らず、而して他を導かんとするに、之に相當せる諸種の資格を具備せざる可らず、然れども人に、皆長短あるものなれば、一人にて諸々の資格を完備せんこと、望むべきにあらず、例へば唱歌に堪能にして、辨舌さいやかに、其容貌に愛嬌ありて、動止優雅ならんといはれ、頗る望まじきことにて、是等は確かに組長たる人に大なる勢力と、便宜を與ふべきも、這は柳の枝に櫻の花を咲かせ、梅が香を添へんとするに、等しく何人も願ふて得べきことにあらず、故に是等の点に於て多少缺くる所あるも、尙ほ恕すべし、獨り左に掲ぐる數項の組長たるに、是非とも其一をなに、欠く可らざるものなり。



一、傳道の精神

ある教會に一人の組長ありけり、此人規則だちてよく組會を催せしが、或時其教會に於て大なるリバイバルあり、連夜引き續きて牧師も會友も總掛りの大運動をなし、熱心に信者を奨励し、未信者を誘導し、一意傳道の働きに餘念おかりき。然るに前きの組長は、恬として知らざるもの如く、連夜は愚か長き間の集會に唯の一度すら出席せしことなし、然らば彼れを折あしくも、其時業務非常に多忙なりしかといふに必ずしも然らず、日々店頭に坐して、來る人を悉く相手に、天氣の晴曇、世間の取沙汰に時のうつるを知らざりしと云ふ、斯る人果して眞の組長といふをう可き乎。

又他に一人の組長ありけり、此人の連夜祈禱會とか、リバイバル會とか、聖誕節とか、小兒の日とか、總じて斯る特別なる集會のある時に、必ら

ず人先きに教會に出席して甲斐なくしく立ち働くと雖も、平常の安息日若しくは水曜の祈禱會などに、則の途を切りし如く、更らに其人の影だに見せしことなし、是れも亦眞の組長といふ稱するを得じ。

此の僅かに極端なる二例を挙げしに過ぎざれども、苟も組長たるから、おの傳道の精神即ち神の榮光の彰はるゝを欲し、人の靈魂の救はるゝを望み、此二つの欲望の絶えず心のうちに活動し居らざる可らず、斯らん時に、假令ひ止みがたき事情ありて、一回二回欠席したりとて、其がため躓く人もなかる可し、之に引き換へ不幸にして若し、その組長にして傳道心冷淡ならむ、如何はと唱歌に巧に辨舌よとみなく、容貌うるゝしく、立ち居まどやかなりとも、何れも皆益なし、心の誠といつはりとも、何時しか人の看破する所となるべきあり。

二、品行の方正

この云ひずして知れたることなれども、此に品行の方正といふ酒をも嗜まざる、悪しき場所にも立寄らずして、身持をくづさずとの意にあらざる、唯だこれしきのことならんに、敢て教會の内に求むるに及ばず、世間にも亦幾多の品行方正の人を得らる可し、  
 一人の組長ありけり、此人相應の身代もありて商賣もまた繁昌せり、然れども教會の信者の多く彼の營業の方法を疑がひ、誰いふとなく彼の危険の人なり、油断のならぬ男なり、得意を欺きて偽物を賣り付け、詭計を用ゐて暴利を博せりとの評判起れり、この會員の全部が然か信せしにあらざる可きも、少くとも其人の感話獎勵等には毫も重きを置かず者なきに至り、中に其人の信仰の有無をさへ危ぶむものあるの姿となれり、  
 又ある組長の既に細君のある人なりけるが、其組の或る婦人とは餘り

に慣れしく交際し、餘所眼にも怪しまるゝ程なりき、尤も其信仰の外見の甚だ熱心にして、組會の席の祈禱といひ、感話といひ、更らに怪しかる振舞のありども思われざるに彼の忌めしき評判の日を追ふて漸く高く遂に教會にて棄て置き難く公けに事の虚實を審判せり、然るに何ぞ圖らん、先きの風説の事實なりと判明したりしかば、止むを得ず之を放逐したり、彼の不埒の行跡のありし時にも、尙ほ恬として組長の職をとり居たりしなり、恐ろしきことにあらずや、  
 一人の組長ありけり、彼の差して腹黒き人にならざりしも、事實をありのまゝに語らず、動もすれの針小を棒大にし、ひたすら他人の注意を喚起するをよるこゑの癖あり、一々彼が虚言の証據をあぐるの難きことなれども、人皆彼を緯名して『法螺吹』と云ひ、心ひろかに爪弾きするお至り偶々眞面目に大切のことを語るも誰とて其言に信を置かざ

るに至れり、これによりても組長たる者の其身を謹み、假染めにも後暗きことなきやうに心掛く可し、若し一度其名譽に負傷しなば、縦し其疵のいゆども痕の何時までものこりて失せざる可し、世に正直潔白はと貴きななく、又勢力あるのなし、

三、常識

ホレス・グリーレー云く、『常識の我等の時代の英智なり』又曰く、『美識および高識の常識の半だも有用のものならず』蓋し常識の萬人が萬人、自然に享有せる所の普通知識を指せるものにて、圓きものがまろく見え、角なるものを角と見止め、黒の黒、白の白にて、正しき事を正しく見て、正しき時に正しく行ふ、是れ即ち常識なり、左れば常識と一口に言へば、甚だ容易なるが如くなれども、其容易なる

常識の圓満に發達したる者の多からぬこゝろ、不思議なれ、世間に變人とか奇人とか稱するの、皆この常識の缺乏せる人を指して云へることなり、此輩は皆無學の者かと思へば、案外文字ある變人多かり、斯く學者に變人の多きが如く、信者にも亦變人あり、殊に熱信と云へる美服を纏へる者におほかり、然るに組長の信者の嚮導管理者なるをもて如何に信仰のあつけられど、萬づに中心を外づれたる人にて、安全なる嚮導者として依頼しがたし、常識の時に臨みて、智畧となり、變に應じて、頓才となるものなり、組長の組員を監督するの、智畧なかる可らず、彼の時を定めて、組會を催す時などおと、いふまでもなく、殊に頓才の必要あり、頓智と云へば、奇言を弄して、頤を解き、秀句を吐きて、坐興を添ゆるなどの如く、思ふ可れども、其の大なる僻事なり、譬へば、婦人に對して、婦人のやうに、男子に接して、

男子のやうに豫ねて其人の境遇性質等をも心に呑み込み居て取扱ふ、是れ即ち常識なり、特に病人などには常識ある組長が一言の慰藉よく百薬にまさる効を奏することあり、

ある一人の生意氣なる信者ありけり、喋々辨にまかせて己が悪魔の誘惑をかゝりしことを、先づ不辨舌の分疏より説き出して緒言本論結末と、山鳥の尾の長々しく演説し、組長様の御意見の如何にやと云ひければ、組長少しも取合はず、頓がてつと立ちあがりて、『兄弟よ今後若し其悪魔が來りたらば、天秤棒もて擲り給へ』と當意即妙無造作に云ひ放ちたれば、衆は呆然、生意氣信者の靦然暫がはどの一座全く無言なりしが、此の膠なき組長の一言却て彼のために、時に取りての頂門の一鍼たる効を奏し、再び斯ることを云はざるに至らしめしとて、尙は斯る實例の今一々枚擧に遑あらねば、讀者が日おる見聞せられし所に一任し

て、次ぎの資格に論及せんとす、

四、智識

予爰に智識と云ひて、學識とは云はず、勿論學識あるにまさりたることなしと雖も、人々境遇の同じがらず、素養亦異なれば、只組長としてその職任を盡し得るだけに一通の教育ある者なればよし、其餘の智識は世の文學を教ゆる學校より、キリストの學校に於て學ぶところなかる可らず、亦組長として悪魔の襲撃防禦の方法、信仰の成長および蹉跌の原因などをあきらめ、此等の場合に應じて如何に聖書の語を適用す可きかを辨へざる可らず、故に先づ組長たる者の最も研究す可きものゝ一つは聖書なり、聖書に次ぎて肝要なる、善良なる註解書と信仰を養成す可き實驗的の教書類なり、

なほ其他に組長希望さしき、定例の組會の時の外に折ふし教會員の

うちにても、心靈上の經驗ふかく、相當の學識を備へたる先進者の許を  
音づれ之れと懇談して、其意見を叩くことなり、必らず利益ある可し、

五、同情

羈旅にの同伴者を要し、人世の人情なかる可らずとかや、エルサレム  
の都を出で、エリコに下れる或る旅客の寂しき山路にさしかゝれる  
時、ゆくりなくも強盜にいであひ、纏へる衣服を剥ぎとられ、剩さへ其身  
をうち擲かれて、息の根も絶ゆるばかりとなれり、斯くて後此路を通過  
せるもの、祭司といひ、レビと云ひ、何れも徳を修め、道を行ふと自稱す  
る輩なるに、何事ぞ揃ひも揃て只僅かに近より視たるのみ、何の手當だ  
もなさざりき、如何に情けなき人々ならずや、然るに之に次で來りしサ  
マリヤ人の元より、旅客と何の縁故だもあるにあらざるに、一見憫れを  
催ふし、自ら劬りて馬に乗せ、之を宿屋へ送り、届けて親切に介抱し、又其

費用を辨せり、是れ豈美しき同情ならずや、我輩この險惡なる人世の逆  
旅をたどりて、屢々途お躓き、向路に迷ふとき、計らざる他人の同情を乞  
て大に自ら慰むることあり、是れ何人にも其實験あるとならん、今組長  
お缺く可らざる者の此『善きサマリヤ人』の情け深き心掛けなり、人間  
の性質として、我が憂苦の包むにあまりて、洩れ出るまでの、容易に之を  
他に打ちわけざる者なり、諺に『哭く者の室を求む』とかや、心に萬斛の  
泪を湛へて、面に自忍の笑をよほふ者、往々あり、組長たる者宜しく此  
機を察し、喜ぶ者と偕に喜び、哀しむ者とともあかなしめ、  
組長の會員の貧困者お對して、之に同情を表す可し、時勢の變遷、不慮の  
災難等によりて、俄かに貧しくなりし者、に、特お然かす可きなり、我教  
會條例、長吏會の問題のうち、ある『一時の救助を要する者ありや』と  
あれ、金錢物品を惠與すること、の時より、時よりて、爲す可きの美事なり

と雖も唯組長が職務的に之を手渡すのみに止り、若し同情の熱涙をも添えて贈るとなくんば却て渡す人おも受くる者にも害あればとて益なかるべし、

組長の時によりての竊かに自己の財囊をひらきて恵まざる可らざるの折あり故を以て組長の決して守銭奴たる可らず、餘り損得の一念のみ熾なる者の應さに爲すべきの義務も心後れて之を果しえず、斯すれば己が腹をいたぬ無代價なる言葉を以て同情を表せんとす、斯る慰藉の仮令千言萬語を繰り返すとも、鳴る銅や響く鉄の如きのみ。

六、熱心

巴里の美術館に精巧なる一彫像あり、元と之が意匠を案出せる技師の、赤貧洗ふが如く僅かに狭少なる頂樓に住居し、此をばおのが工場にあてたり、一日天寒して眞白ふ霜の降りけるとき、彼が日夜お生命を打ち

込みたる摸型の畧ぼ落成したりしが思らく今夜の危険なり、此粘土の罫にゐる水分の凍らんおの千仞の功一箕を缺けん、乃ち衾を蹴て起き、盡く寝衣を脱して摸型を庇へり、然るお翌朝技師の死體の左ながら彫める肖像の如くなりて發見せられぬ、されど彼れを死して、其意匠の救これ、長く大理石の彫像となりて世おのこれり、

ヘンレー、クレイ云はく、「一の緊要なる問題を演説するとき、他人お於て如何なる可きや我之を知らず、然れども我の斯る場合に於ては、外界のあるを識らず、我が心の全く我が前にある問題に占領せられて、我をも時をも總て我が週邊のものをも盡く打忘るゝ至る」  
熱心の前に困難なく、罵辱なく、誹議なく、嘲笑なく、迫害なく、老衰なし、人の一生懸命となりて、全心燃えたつとときに、石も碎け、鉄も折れ、天地の間神の外に何物も彼に觸るゝ能はず、

組長の重任を負ふ者あり正に此熱心なかる可らず獅子は兎を捕ふるにすら其全力をもて之を搏つと云ふなるに組長の組員を管理し嚮導する、豈に不熱心を以て、克くし得可んや、或所に組長ありけり組員の數、六十六名なりし、然るも如何なる故にや、組會毎に一人減じ、二人減じ、遂に一人の出席する者なきに至れり、斯時組長の自ら顧みて深く組會の不振を恥ぢ思へらく我の其任あらず、教會信者の數多き、必らず我に代る可き組長の器他にあらん、我は牧師に乞ふて辭職す可し、然れども之を他人に引き渡すに先ち、組員の住所名簿を明確ならしめ、今一度び最後の組會を開らき、而して後ち心よく辭職せんものと決心し、其日よりして熱心會員の訪問を初めたり、然るに此組長或所にては病人を見出して懇々之を慰め、或所にては會堂の出席を怠る者に遭ひて諄々之をばげまし、斯くて初めの程の無據訪

問えたるなりしも、遂に人々を勸めて自分も勸められ、人を慰めて自らも慰められ、大に信仰を堅くせり、而して次ぎの組會あり非常の盛況を呈し、會員のおほかた出席して組長の訪問を謝し、信仰の復興せるよしを語り、此に於て組長はおのが是れまで不熱心にして其職を盡さざりしことを悟り、辭職のことも全く思ひ止まりて、爾來最も熱心忠實なる組長となれり、と云、上來論述せる所の『組長の資格』を讀み、是れ畢竟牧師傳道者のごとくにして我に左る賜ものなし、而して若し之なきとき、組長の職務を果し難しとわれ、唯辭職の一事あるのみといふ人あらん乎、嗚呼何ぞ思ふべきの甚しきや、人の皆の度に於てこそ多少の相違あれ、以上の六質を具へざるのなし、而して是皆修養によりて大に發達しう可きものなり、誰か品行方正にして、傳道の精神の熾ならんことを願はざるも

の予常識を増し、智識を加へ、以て熱心道のため其境遇に應じて働き得るの神の恩寵にあらすして何ぞや、

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く）

第五章 組長の二性質

組長の盛衰は組長にあり、組長の成功は組長の性質を辨知するにあり、唯だ組会といへば、一週一回、會員を集めて人間の恚弱とか、悪魔の誘惑とか、罪過の懺悔とか、地獄の刑罰とか、總じて玄めやかなること、左ながら葬式の席にでも列したらんやうにては、是れ大に組会の本旨に反れるものなり、此に一人あり、朋友の切なる誘導により、初めの先づ日曜日に教會堂に出席して、教師の説教を聞きしも、萬づに不案内なれば何にやらさまりわろく、牧師の説教の難有きやぶなれども、一向に合点ゆかず、左りどて自ら進んで牧師の門を叩き、不審を質すほどの勇氣もなし、然るに或日のことに近隣に組会とか云へる催しあれば出席せよとの勸にまかせ、到り見るに、席上既に十數名の人ありて、學者らしきあり、商人らしき



あり、金持ちらしきあり、貧乏人らしきあり、百姓らしきあり、一同車坐ふ  
 なり、上下の別なく、互に胸襟を披きて、必のありさまを吐露し、其融々ど  
 して寛げるさまを見、忽ち我も亦其一人にありたしとの冀望を生じ、遂  
 に此組會が渡しの船となりて、幸なる基督信者とはなれり、獨り此一人  
 に止まらず、斯の如くにして、教に導かる者、蓋し今日の教會に、慚か  
 らぬことなる可し、  
 日曜日の禮拜の重みに、信者のため、殊に經驗ある信者のためなれば、新  
 らしき求道者に、とりて、更らに何等の興味もなく、一時間の経過も甚  
 だ物憂かるべし、然るに組會の云は、日曜禮拜の背面なり、即ち日曜日  
 に教を受けて養成せられたる信仰の有様の表白會なり、昔しの組會に  
 て、教師の説教の後ちにて、其説教につきての信者の所感を述べしと  
 どもありしと云へば、日曜禮拜の背面の集會ならざる可らざるが如し、

而して此集會の大切ある特質とも云ふべきの喜樂なり、故に事の次第  
 によりて、憂悶痛苦等のこともあらんかなれども、元より基督の教の  
 罪人の救ひれて永生を得るとの福音なり、天國の境涯に入りて享樂す  
 どの教あり、彼の常に悒々として打ち沈み、其祈禱の吟呻の如く、其感話  
 の悲嘆の如く、世を果敢なみ、生を厭ふやうなる、健全なる基督教の信  
 仰をもてる信者といひがたし、  
 我組會をして斯る厭世家の陰氣ある寄合ひならしむるなかれ、是れ多  
 くの人をして喜んで此會に出席せしむる所以にあらず、わがメソヂス  
 ト教會の盛大にして、今日尙は大に進歩しつゝある、此喜樂のをしへ  
 あるがゆへなり、教會の勢力の學校の盛大にあらず、禮拜法度の壯嚴な  
 るにあらず、獨りこの喜樂に由る乎かし、  
 一種の口さがなき儀式家の云ん、メソヂスト教會にての會集頻りに

『ア・イ・メン』を濫唱し、禮拜の神聖を潰すばかりに騒がしど然り心にな  
 るして口に之を唱ふる元より不可なり然れども今日の教會の病弊  
 の餘りに『ア・イ・メン』を云ひざるにあり餘りに讚美歌を貴まざるにあ  
 り餘りに感情を壓するにありさればこそ牧師が教會の廣告にも、『安  
 息日禮拜』といふべきを、『安息日説教』といひ而して祈禱の説教の  
 前口上の如く讚美歌は説教の先觸れの如く、『オルガン』の人寄せの大  
 鼓の如くに思はるゝなれ嗚呼何予誤れるの甚しきや抑も説教の祈禱  
 および聖書の朗讀と共に禮拜の一部分にして讚美唱歌の如き信者  
 が敬虔の感情の溢るゝばかりなるを典雅に云ひわらはさんがために  
 之に調子を附けたるものなりと知らずや  
 感情は表實的なり他の祈禱を静聴し其要點に至り同感に之堪えずし  
 て、『ア・イ・メン』と和唱す何の不可か之あらん去る頃予が知れるある

婦人は組會の席に於て、『妾の此兩三日は聖歌集の第三百三十一番あめ  
 にたからが歌へてうたへて一回一回より愉快に立ちての歌ひ坐し  
 ての歌ひ之を幾十度となく繰返せばくりかへす程興味津々として物  
 の譬へんやうものべらず』と云へり  
 又或人曰く、『宗教より總ての感情を排除し單に原理よりて神に事  
 んどの思考は悪魔の計畧なり宗教よりよき感情を排除したる境には  
 彼の所謂原理に誠に些少の力をのみ剩すべきのみ』と  
 組會に出席せず組長の世話を受けざれば喜樂的基督教の生涯を送る  
 こと能はずとの云い然れども百有餘年の間メソヂスト教會の特有  
 おして然かも今日尙ほ其勢力たる宗教的喜樂の熱信ある組長と熱信  
 なる組會あしに之を持続せんこと甚だ覺束あきの次第あり  
 或る經驗ある組長の云く、『我の互に組員として相愛するの途上に避

近するや互に親切ある言葉をかけ、富めるも貧しきも、老たるも幼き者も、すべて其利害の感を同じ、毫も城壁を構えず、その組會の室に會するや、宛も一家族の如く——主キリストに於ける兄弟姉妹の一團樂として會す、我等の嘗て乾燥なる組會を催せしことなし、却て愉快ある有益なる精神的なる主の前に在て天を待ち望むの集會を催せり、……我は信仰の弱き者あるひに若き信者の組會員、ひに高等なる基督教の生涯を示めし、而して之をバ助くれども、敢て迫ることもなく、又最も文字あき者をも蔑視むやうのことなし、我の我組の我を愛するを確知す、而して組員も亦私の彼等を愛するを知る、此を以て我の神の恩寵により、(聖靈我等の不完全を助くるふより、恩寵より恩寵に進み、榮光より榮光に進み、つとめあり)と、

同じ組長の曰く、「我の組會を愛す、我の組會が我等の愛するメンヂス

ムの脊骨たるを信せ」と、

組會の性質として、喜樂の次ぎに缺く可らざるもの、會員互に徳を建てることあり、聖書に『是故に爾曹常に行る如く、互に慰め又おのの徳を建つ可し』と、帖撒羅尼加前五〇十一我メンヂスの教會の、正さしく此パウロの勸告に適へるものなり、勿論この他に信者が私宅に會合して互に慰め且つおのの徳を建て得可しとい、信すれども、我教會管理の下にありて、一週一回規則だちて集會を催すに比すれ、其利益益同日の談ふあらじ、

コークおよびアスペレイが著したる條例解釋に曰く、『時日を一定して集會を催す、おあらざれば、基督教徒の交際をして著しき利益あるは、お行はれしむること難し、而して此目的のため設けられたる集會、お其を區別する所の名稱なかる可らず、我等の之を名づけて組會とい

ふ、然れども此も我等が論辨する所のもの、其名おあらずして其實なり、即ち基督信徒の交際其物お注目せざる可らず」と、  
 水の方圓の器おしたかふ如く、人の朋友の感化を受く、即ち君子に接すれば、自づから其よき感化お薰陶せられ、小人と交はれば、覺えず其おしき氣質に感染す、ソロモン云く、「智慧ある者と偕ふあゆむもの、智慧をえ愚なる者の友となる者のあしくなる」と、心、心を動し、靈、靈に通ず、一人の言、よく會衆をして潜然として泣かじめ、哄然として笑はしめ、憤然として怒らしめ、肅然として襟を正さしむ、我等の社交に於るも亦然かなり、新婚の席お其愛で度さを祝し、葬式の場に亡き人の果敢なきを悲しむ、神の人間を造るや、歡樂の之を分つによりて増し、悲哀は之を分つおよりて減する如く、定め給へり、我教會の組會の正さしむ此人性の必要お基ける者なり、互お慰めおのく、徳を建つるに於て、これ

ほどに適當なるものあらず、而して其目的を達し、之をして有益なる會合たらしむるの組長の任にして、嚮導の有様、司會の方法の宜しきを、得ると、然らざるにあり、然れども此の唯組長一人にて總ての人を慰め、徳を建つるや、おす可し、とに、あらず、集會者をして、何れも少しづつなりとも、其感ずる所を語らしめ、互に自餘の人を慰めうるや、且つ、其れによりて、徳を建つるや、になさしむるにあり、  
 多年組長として、經驗ある人の司會の方法を記さんに、初めに先づ、讚美祈禱をなし、のち、場合に相應せる聖書を朗讀して、短かく之に説明を附するを常とす、尙ほ又、其時の模様によりて、隨時の斟酌あり、之に次で、讚美一節ばかりをうたひ、先づ、老成の信者より、口を啓きて、其經驗を語り、出でなば、次ぎに、青年を乞ふて、其實験を述べしむ可し、人の銘々性質を異にするものなれば、動もすれば、只事物の暗側をのみ見て、痛嘆す

癖の人あり、故に斯る人の語りしの中に、成る可く氣質の反對の人、即ち克く明側を見て常に快活ある人に發言の折を與ふ可し、斯くせば討論がましき事なく、互に問はず語り利益を得て、絶えて單調に陥るの心配なかる可し、

又土地によりて、男子と女子と其組會を別々にすれども、成る可く男女合併の方よろしからん、然れども這の其教會の事情もあれ、強て之を合併するの悪し、何れにするも組長の豫じめ克く其組員の性質を熟知するを要す、

左も亦き時の組長の差圖の餘りに行き届きて、斯くす可し、然かす可らずとて、萬づ拘束に過ぎ、自由を失なひ、始終儀式をりて、窮窟の思ひあらしめ、云ひ度き人もえいはずして止むことある可し、故に組長に其邊の加減を呑込むこと肝要なるの云ふまでもなけれど、中にも最も肝要

なるの組長の活ける精神にあり、諺に曰く、「善き初まりの成功の半ば」とかや、或組長の組會をして生命あらしめ、且つ會員をして警醒せしめん爲めに、先づ自ら密室にありて祈禱し、信仰と愛心とに充滿せられて、而してのち組會を出づ、斯る組長の其云ふ所簡單にしておのづから義理能く通暢し、深く會衆を動かすべく、彼の即席の所感を、一時の責め塞ぎに辨に任せて長たらしく陳べたつるとい、其間天地の相違あり、此に組長の注意す可き、其感話の簡單ならんことあり、組長自身に冗長にして、他に短かからんことを望むのかたし、若し不幸にして會員各自組長にならひ、銘々に小演説を試むるに至らば、徒らに時間を浪費するのみにて、互に慰さめ、おのづか徳を建つることの愚か、却て互に苦しめ、おのづか退屈に堪えざるに至らん、或の會員のうち、組會の振合ひ不案内なるよりして、己が生立ちより信者となれるまでの長さ來歴亦

ぞを諄々述べ立つる者もあらん、或の多少おのれの辨舌自慢のために、  
 之れ聞けよがし、長々と組立たる一場の演説を試むる者もあらん、斯  
 る時の話の半ばに制止するともならず、左ればどて其儘にして他の會  
 員の耳を犠牲に供するにも忍びざれば、靜かに其場に於て常識の是認  
 する方法によりて注意するか、若しくは他の時竊かに其人に面會して  
 柔かに諫むるか、宜しく二者其一を取可し、何れにしても是れ組長  
 の判断によるべけれど、要の會員をして躓せざるにあり、或る司會者  
 の簡單に述べよ、簡單に述べよと、餘りに幾度と亦く繰返し、又一人の起  
 立して將に語らんとするときに、『兄弟よ簡單に述べられよ』と云  
 ひければ、其人面色朱を灑ぎ、『私のお話を差し扣へます』と言ひ放ち  
 て着席せり、組會を司とる者の心すべき事なり、  
 或る組長の長き話をする會員を制止せんがために、一策を案出し、其人

に適當せる聖書の一二句を讀みて彼をして短かく祈らしめたり、斯る  
 方法の極めて親切ある言動を以てせざれば、却て躓かすことある可し、  
 或の彼の話の切れ目に乘じて、他の者一齊に讚美を高らかに歌ふて、其  
 話を中止するが如き、如何にも人の悪るき方法にて爲すまじき事な  
 り、  
 組長のまた僅かの限りある時間に、成る可く多くの人々に語らせんと  
 欲せぬ會員の所感に一々受答へをするを要せず、殊更ら長く教會に在  
 りて信仰の経験ある會員の受けとたへをなす及ばず、若し之れに  
 同意を表せんとならん心よき「アーメン」を唱ふるにても足りぬ可し、  
 最後に組長の注意を促がす可き、總て會員をして強て語らしめざる  
 ことなり、場合によりての組會出席するも敢て語ることを欲せざる  
 者あり、又場合によりての自ら黙して他の語る所を聞かんことを願ふ

者あり、是れ其時と人によりてよみす可き事あり、故に組長たらん者の組會毎に出席者の總てをして必らず語らしむべきの義務ありと思ふ可らず、故にまた之を強ゆるが如き様子ある可らず、之を要するに組會に缺く可らざるもの、其集會の喜樂的にして、且つ建徳的なるに在り、此目的を達せんがために、土地の事情、教會の様子をも斟酌すべし、之をして實際効力あらしむると否などの、組長其人の注意如何にあり、

第六章 組會に對する反對論

組會の如きものに對して、更らに反對のある可き筈なしと雖も、事實の之に反し、往々我教會の組會を對して、是非の沙汰をなすものあり、或人の組會の制度を目して、聖書的にあらせと云ふ、然れども其聖書的にあらせと云へるの、之を特別に聖書のうちに啓示しあるなしとの意なれば、首肯し得るも、若し此制度の聖書に特に啓示する所にあらざるゆへ、其教に適いざるものなりとの義とせば、予輩の全然此反對に反對せざる可らず、果して論者の云へるが如く、我組會の制度の聖書の教に適いざるものならんに、此組會に出席するも亦惡しき事なり、然れ共前章畧ぼ論したるが如き集會に出づるを惡事と思惟し得る者誰かある、若し果して論者の反對する如くならん、此の同じ道理を推して考ふれば、何人にてても現存の何某教會會員たらんとし、若しく其會員

たるとも亦是れ悪しきことなり何となれば何れの教會の制度にても、これ皆特に聖書に啓示せられたるものにあらざればなり、總じて斯る教會設立に關して必要なる一教會の規條例等、唯左の二問に對して不都合なき時の我等の正さに遵守す可きものなり、云く、其制度の果して聖書の教旨に反れるものなりや、又教會の利益を進むるものなりや、其制度にして聖書の教に反らず教會の利益を進歩せしむるものならんに欣で之を遵守せざるの理由あるべからず、眞正なる教會に天啓の原理に基き之が設立存在に必要なる規約法度を設くるの特権あるものなり如何なる社會にても其存在と秩序を保存するに之がために必要なる統轄權なき理なし、然るに今神の意に反らずして教會の利益を増進せんがために必要なる制度の嚴在するに拘らず其教會員として毫も之を念頭に置かず或は之を破りて意

とせざるに於ては果して如何我メソヂスト教會員として敢て組會に出席を怠る者果して如何予輩の讀者が各自に此重要なる問題に答られんことを願ふ、或人難じて曰く組會のメソヂスト教會特殊のものにて基督の教會の昔より嘗て斯るものなく以て今日に至れり今も尙ほ重なる教派にて組會の如きもの之なきも甚だ盛大なりと此反對論にして若しも我メソヂスト教會員の口より出でしめれば我教會に留る可きものにあらず我教會の特殊なる巡回傳道法特殊なる監督制度特殊なる長老司制度特殊なる會員入會の法其他のメソヂストの特殊なるもの、彼の組會と等しく特殊なり而して組會の特殊なるがゆへを以て之に反對せば勢ひ他の制度にも特殊なるの故を以て之に反對せざる可らず、又此反對をして他の教會員の口より洩れしめり予輩之に答へてい



はん、何故に我教會の特殊を捨て、他の教會の特殊に従ひざるか、宛  
 も他の教會の特殊をすて、我教會の特殊に倣ひざるに同じと、蓋し我  
 メソヂスト、教會の制度の、我教會に特殊なるの宛も他の教會の制度の、  
 他の教會に特殊なると一般なればなり、  
 重に我メソヂスト教會外の者の唱ふる難論に曰く、メソヂストの組會  
 の之を組員に限りて公開せざるが故に不可なりと、是れ元と組會の特  
 別なる性質と、之が重要な目的とを辨知せざるより出づる説なり、抑も  
 組會の教會管理の一方に於て、新たに我教會員たらんことを願ふも  
 のと、又長く教會員として連らんと欲する者などを監督して彼等が教會  
 員たるに適當なるやを確知するにあり、組會の會員のため、牧會的任務  
 を適當に盡さんがために、會員の心靈上の有様および之が要求を確知  
 するにあり、組會は會員の矯正、若しくは除名に其條例を適用す可き場

合を確かむるにあり、組會の蓋し此の如きものなり、果して然らば他教  
 會の會員たる者、若しくは何れの教會にも屬せざる者は、我教會の此等  
 の制度に對し一点の權だもあるとなし、是れ明白の事實なり、他教會會  
 員たらんことを願ふ者が、我教會の管理と訓練とを要せざるの猶は我  
 教會員たらんことを願ふ者が、他教會の統轄と教訓とを要せざるが如  
 し、  
 故に予輩の更らに組會を改變するの義務なく、又改變するの便宜なる  
 をも知らず、若し此組會を公開して何人にも出席の自由を與へたらん  
 に、甚だ都合にして組會なる制度の設けられたる特別の目的を達  
 すること能はざるに至るや明けし、  
 或人難じて曰く、組會の人をして心にもなき宗教上の告白をなさしむ  
 る誘惑ありと、然れども組會の性質に於ても、其方法に於ても、左る思は

しき偽善を唆かすものにあらず、人の或の組會に於て偽るものありとせん乎、此人唯組會の席にのみ限りて偽るべきにあらず、其他の宗教上の經驗を語合ふ集會に於ても、虚偽の告白をなすべく、又牧師の會友を訪問する時にも、其心靈上の有様につきて、或の實を告げざるべし、然るに今偽善の振舞を止めんとて、牧師の訪問をも廢止す可しといはば、是れ極めて不通の論ならずや、組會も亦然り、只斯る弊害あらんことを恐るゝのゆへを以て、之を廢止するが如きとあるべからず、或人曰く、組會に於て組長が各會員をして語らしむるの場慣れざる者、又ハ辨舌の鈍きものに取りて、甚だ迷惑の次第なりと、是れ一應の尤の如くなれども、其方法若し宜しきを得ば、大に其不都合を減じうるものなり、故に萬一斯る場合もあらば、豫て之を組長に告げ置くべし、又組長に於ても、其れを察せし時に、強て斯る人に其經驗を語れど勸むる

とをせず、此方より簡短なる問を掛けて其信仰を尋ぬ可し、自ら打ち出で、語るに難き人も、他の間に引かれて答ふるの容易なるものなり、又其困難を排除するの良法あり、元來人の自ら決心して其を敢てせんと欲せば、遂に慣れて聊かの不便をも覺えざるに至るべし、然るを不幸にして之が反對の方向をとり、自暴自棄公けに、話しの出来ぬ者に見限り之が爲めこれまでに幾らかありし勇氣をさへ消滅せしめ、次第に憶病になりゆきて、後に殆ど全く感話の出来ぬやうになる者あり、此の如き人に處するに、組會に對する義務の念を熾んならしめ、其義務を果さんとの決心を起さしむやうにす可し、聖書のうちにも、我等の常に柔和と恐懼とを以て、己がうちなる希望の事わけを問ふ者あらば、答ふるの備せよと命じわれ、這のまた基督信者としての義務なるぞかし、

上來云ふ所の、其不辨舌に氣後れなどして、我の公けに語らじと思へる人のために論せしまでなり、組會に集會せし人の如何なる時に於ても、皆盡く口を開かざれば、其義務を怠りし者と云ふに非ず、

ある人曰く、我の組會に出席するも、何の益する所なしと、思ふにその益するところなきは、其人の心がけの如何にありて、組會其物の關する所にのわらざる可し、又縦しんば少數の人の公平なる經驗の後、組會によりて直接何の得る所なしとするにもせよ、我メソヂスト教會創立以來、今日に到るまで非常に教會を益したる、此の如き制度を忽緒に附するの理由どいなすに足らず、組會の主意の素より説教にわらず、禮拜にわらず、又智識の交換にもわらず、其組員の信仰の有様を確かめ、之を管理するにあれば、其心にて出席したらんに、大に失望することもなかる可し、人に素養の多少あり、學識の淺深ある可しと雖ども、心靈上の

實驗談に至りては、差程の區別なきものぞかし、否な却て大學の人、無學の者に學ぶ所なかる可らず、

或人曰く、組會の宗教の特權にわらずして、教會の要求なり、故に之に出席するとせざるは、其人の意に任す可しと、然れども此制度の會友たる者の規約として、此組會の性質目的より論ずるも、之に出席するの會員たるもの義務なり、若し此制度を論者の希望の如く變更して、其出席を隨意となさん乎、然らば其時に組會に出席す可きもの何人なる乎、よき信仰をもてる者、熱心の者ども、こゝろ集ることあらん、多數の不熱心なるもの、信仰の冷却せんとする者等、皆出席せざるに至る可し、然れども組會の性質より云ふも、此等の人々、こゝろ却て組會に出席することの必要あるものにて、亦此等の人々あれば、こゝろ組會の制度も必要なるなれ、

此章を終るに當り、一言し置く可きとあり、組員若故意に續けて組會に出席せざる時、之を禮拜の法度を怠るものと看做し、教會の審判に附するを得可しと雖も、此の容易ならざる事なり、宜しく先づ組長たる者熱心と同情とを以て、充分に之に諫告すべし、然る后ち之を牧師に告ぐ可し、牧師のまた百方これが回復を試みたる后ち、愈々所置す可きものなる時、正當の方法によりて處分す可し、然れども此人他に犯せる不道德の罪ありて、之が証跡を詳細に擧ぐるの頗る繁雜困難なるに反し、其組會の出席を怠るの事實の明確にして之を擧ぐるの容易なるがゆえ、單に此一事を以て審判を開くの口實となすのみに非なり、斯くせん神の定め給へる他の道德上の罪よりの組會に重きを置くが如く見ゆるの嫌われなり、

英文條例の明文によれば、禮拜を故意に守らざる者を處分する語の放

逐す可しとあらずして、『除く』可しとあり、組長たる者の此の區別を克く明かに記し置かざる可らず、

第七章 組長の取扱ふ可き各種の信者

其一

前回に於て、或る求道者が教會の説教を聞きしだけにて、未だ入會の決心なかりし者、後ち組會に出席し、親しく信者と交際せし爲め、其縁故によりて、遂に領洗の上、教會の會友となりしことを述べたり。新求道者の日曜日に出で、説教を聴く、固より大切なりと雖も、斯る求道者を教會にて待遇する方法の如何によりて、切角の善き説教をも無効ならしめ、却て快からぬ感傷を懐かしむることあり、兎角に人の最初に受けたる感動によりて、其去就の決心を左右せらるること少からず、されバ新來の聴衆を懇慫に取扱ふ適任者の何人なるかと云へバ、予の猶豫なく、組長なりと答へん、勿論大抵の教會に別接待員なる者ありと雖も、這の極めて少數の人にて多數の人々に接することなれば、新

來者に向て親しく話すことも叶はず、僅かに會釋して相當の席を見計らひ、之を其處に坐せしむるに過ぎず、去れば組長の克く此新來者を見留めて説教の後、親しく言葉をかけ、名刺を交換し、宿所を開き、再來を約するなどのことを忘る可らず、又機轉を利かして、「今日牧師の説教のみにて、定めし御不審の節もおぼかる可ければ、幸ひ次ぎの金曜日、の夜、貴家の近隣なる某氏の宅にて、我等が組會と申す面白くして有益なる集會あれば、之にも御出席ありたし、信者達の互に打ち解けて語る所を開かれなば、或の教義の御瞭解の一助ともなる可し、又其節に牧師も來會す可れば、親しく御交際あらまはし、」など勸むるも大切な組長にして、傳道精神熾なるとき、如何やうとも臨機の方法の思ひ付くものなり、

是れの新らしき求道者に對する、組長の心得なれども、予が此に三種の

信者と云へるものあらず、然らば其三種の信者とい誰や、  
 第一、新悔改者——平常の時の云ふまでもなし、リバイバルの時の如く、  
 俄かに多数の信者の起りし場合に、其教會の組長たる者の遠慮なく、  
 牧師と相談して、新悔改者の住居の最奇に従ひ、成る可く速かに各組に  
 ろれ、割當つ可し、監督トムソン曰く、「我等の宗教的教育を施さん  
 がため、人を入れて試中となす、我等の斯る者を入會豫備者として取  
 扱ひ、而して毎週の組會を、彼等が教習の方法と見做せり」と、  
 我教會のリバイバルの教會なれば、リバイバルのありたる毎に、新悔改  
 者の養成よろしきを得たらんに、今日に幾數倍せる信者を有するな  
 る可し、勿論牧羊の主任者の牧師なりと雖、彼れとて一個の人間に  
 して、他に優れて健康のあるにあらねば、組長たる者其責任を分擔する  
 覺悟あるを要す、

新らたに感化せられたる者の鑄解したる鉄の如し、其鑄型よりて如  
 何やうともなるものなり、故に入會の劈頭に於て組長たるもの此人あ  
 勧むるに組會出席するの信仰養成に必要なるを以てせば、其人の克  
 く組會に出席して長く其信仰を維持し、且つ之を成長せしめ、以て有力  
 なる信者となるべし、然るを不幸にも注意の此に及ばざりしため、憐れ  
 や其信仰の冷却して、全く教會に出席せざるに至るもの幾許なるや、知  
 るべからず、之が爲め神聖なるリバイバルの名を汚し、リバイバルは畢  
 竟一時の感情の發動あして、其命脈の蟬蛻の如く短かじと嘲笑せしむ  
 るに到る概はしきことならずや、  
 新たにお感化せられたる者の赤兒の如し、其生るゝや一時なり、而して其  
 新たに生れたる赤兒として、如何に健全なるども、其當然の保育を怠  
 るが如きとある可らず、今も亦然り、リバイバルによりて生れたる信仰

の赤児の如何に眞正の感化なればとて、之に相當せる組織的宗教保育を施すとなければ、其兒の生ひ立ちや心もどなしといふべし、而して之が保育園の會堂説教を除きての組會なり、亦之が嫁母とも見る可きの組長なり、

思ふに我教會數多の會友のうちには、初めより組會に出席せずして、其信仰を克く今日も持續したる者もあらん、然れども斯る場合の甚だ稀にして、概して云へば組會の出席を故意に怠るが如き者に信仰のよき者少なく、又信仰のよき者にして、組會に出席するを一樂事とせざる者なきが如し、

新たに感化せられし者の其信仰の發途にある者なれば、尙ほ向路に於て種々の困難に遭遇せざる可らず、然れば之を経験ある信者の組に編入するの宛も慣れたる親の道連れを伴はしむるが如し、此道の危険なきが如し、

り、彼の路にの深阱ありとて、曾て一度此等の道路を経過したる者が、豫め新來者に向て警戒を加ふるのいかばかり新進者を利益すべきや、時に失脚する者あるべきも、是亦同じ失敗を閱歴せし者の同情と慰藉に勵され従來より更に一段の勇氣を振ふて進行するに至る可し、且つ夫れ舊き信者もまた新らしき信者によりて、思ひがけなき獎勵を受け、其沈滞せる信仰勃然復興すると往々あり、舊き信者の兎角におけるの經驗をたのみ、失敗にこりて、萬づに氣兼ねして、差したる蹉跌もさきかはり、又差したる進歩もさく、常に四邊を顧慮して、嚮きに教會に入りし時の如く、猛進的の活氣なきを常とす、然るに今端なくも組會の席上自己が嘗て斷然決心せし時の如き新鮮無邪氣なる經驗談を面たり聞き、我と我心におのれの信仰の沈滞不動に氣付くとありぬ可し、左れば新らしき信者となりし者を、既にある所の舊き信者の組に入るべし、

一舉兩得の方法にて、新信者をも益む舊信者をも益するを得、茲に一疑問あり曰く、組長の幾人を以て一組とす可き乎、條例によればおほよそ十二名を以て一組とす可しとあれども、今日實際に此規則に遵ふもの恐らく稀なる可し、或る組長の成る可く人数の多からんを欲し、多数の組員あれば其組會も甚だ盛大に見へ、たとへ多少の缺席者あるも差程著しくは目立たず、且其經驗にも種類おほければ自然と單調に陥るの弊を免かるべしとす、然れども試みに思へ組長の職掌の唯人数の多き組會を開くに於て存せず、即ち組長の組員銘々の信仰の有様を辨知し、牧師を助けて之を管理すると其本領なれば、餘りに多人数にての却て不便のことなる可し、之に反して組員の住居互に遠隔せる場合の如き、十二名以内にて一人の組長あて持てあますはと十分あるものあるべし、故に組員多少の制限り、組長の意見にもよる可し

れども概して管理の行届くと然らざるを以て標準とせざるべからず、折ふし安息日の午後あても、各組を殘らず合併して特別總組會を開くことは是れ大に利益あることなり、然れども這の邂逅に催はせば、各組の模様も知れ振り合ひもわかりて、互により競争どもなりて興味あるなれ、餘りお數々開くとき、平日の各組會の人員を減少せしめ、隨て總組會も各組會も兩つながらどもに損害を蒙むる危険なしとせず。第二、轉會者、—今や築紫の端より千島の奥に到るまで、全國名ある市邑あして教會のあらざる所なく、信者の住せざる地なし、是等の信者の文明の利器に乗じて、東西に往來し、南北に移轉し、長く一教會に留りて信仰の養成を受くる者、年々その數減少す、試みに東京、函館、長崎の如き教會の會員名簿を調査せよ、其信者の出入の頻繁なること最も著しく、



教會の左ながら大なる旅館の如き感あらん、此に於て乎牧師の勉めて  
 移住者に轉會狀を附し、其行先きの教會に屬せんことを獎勵すと雖も  
 も、組長も亦大に牧師を助けて其出で行く者に、暫時の旅行ならざれば  
 轉會狀を附與し、他教會に屬すべき事を心付く可し、信者の信仰墮落す  
 る原因の種々ありと雖も、轉會狀を携へずして新らしき土地に行き、  
 教會の説教も聞かず、善き友の交際もなきと是れ亦其一にして而も尤  
 も恐る可き原因なり、彼等ハ名を旅行に藉るが故に教會に對する責任  
 も軽く隨て煩いしき組長の訪問をも受けず、甲の教會の支配下にある  
 にもあらず、左りとして乙の教會に屬するにもあらず、浪人的の生活極め  
 て氣樂にして且つ便利なるに似たり、然りと雖も信仰墮落の原因、多  
 くの此間に伏在せりとせば豈亦恐るべからずや、  
 又地方の熱心なる信者が、かねて教會新聞などにて都會の教會の通信

を讀み、其盛大を想像して、出京後幾程もなくある教會に屬すと假定せ  
 よ、此人や其素朴なる心に豫め教會に出でなば、初對面の兄弟姉妹より  
 歓迎を受けんとを期し、心に勇みて最初の安息日に出席するならん、斯  
 くて會堂に出席すれば事實の想像に反し、誰一人として親切なる言葉  
 をかけ呉る者もなし、然れども此日の甚だ不快に感じながらも尙ほ  
 全く失望するに至らず、氣を取直して再び次ぎの安息日に出づれば、並  
 居る會堂の人々我が扮装の田舎じみたるに目を留め笑はるゝやうな  
 る心地せん、此に於てか折角に持参したる轉會狀も、此の冷かなる待遇  
 に失望するの極、其の要なしとて遂に夫れなりになり行き、果ては其の  
 信仰墮落するか、左もなく、他派の教會に轉ずるともならん、這ハ我輩  
 の想像談にあらず、實際随分有り勝ちのとなり、基督旅行者を親切に取  
 扱ふ者に窮りなき生命を約束し、「なんぢハ我が旅せし時、われを宿ら

せたり』と宣ひしを思へ、世に旅行者はを別けても信者の旅行者はを精神上に寂寥を感じずる者のみかかる可し朝夕心に浮ぶる我家族の禮拜のこと、我故郷の樂しき教會のことなどにして黙想すれば並み居る會友の姿髣髴として現れ、聞き慣れたるオルガンの音耳底に響くが如し、組長の注意す可き此の如き人なり、組長若し能く注意して見慣れぬ人の教會に出席せるに遇へば、『あなたは何地より來ませし、兄弟におはすや、能くころ出席し給ひたれ』との一言を割與せよ儘かに是れ一言なるも旅人にとりては沙漠の中に水を得、淋しき谷に人の聲音を聞きたるにもまして嬉しがる可し、左れば組長の斯る人あらば早速之を組に編入し、他の兄弟へも紹介し、彼をして八重の沙路を渡り、千里の雲山を隔りたる旅行先さにも、故郷と同じ基督の教會にある感あらしむ

可ひ、第三貧困者——我メソヂスト教會は最初より貧しき者の友なり、教會が貧困者を顧みざる時、我メソヂスト衰退の時なり、世に自業自得にて貧窮なる者も多かる可し、雖ども又社會の激變若しく降りかゝる不慮の災難などによりて、頼るべを失ひし者亦尠ならず、斯る者には教會の力相應に肉體上の必要物を與へざる可らず、聖書に『飢し時に食せ、渴し時に飲せ、裸なりし時衣す』とあり、左れば主任傳道者が、組長會計吏を集めて、其教會の情況を査察するうちに、『一時救助を要するものありや』と云へる問題あるに即ち是がためなり、勿論牧師の總ての會友の生活の有様をも知るべき筈なれども、嚮にも云へる如く、牧師一人にて會友の多人數なり、又其任期も一年づつにして、長くも五箇年より繼續す可らざるを以て、常に會友に接し、親しく其信仰の

様子さまようを伺うかがふもの即すなはち組長くみちやうならざるべからず、  
 貧みしき者ものを恵めぐむの教會けうかいの義務ぎむなり、然しかれども其その方法はうほうの宜よろしきを得えざる  
 とさし却かへつて其人そのひとをして卑屈ひくつならしめ、怠惰たいだならしめ、又また横着わうぢやくならしめ、果は  
 ての彼等かれらをして施濟せさい金を教會けうかいに催促さいそくし、其金額そのきんがくの不足ふそくに不平ふへいを鳴ならさ  
 しむるに至いたる心こころす可べきことなり、  
 組長くみちやうの彼等かれらに勸すすめて、組會くみかいに出席しゆつせきせしめ、講壇かうだん教育けういくの外ほか、勉つとめて心こころ靈れい上じやうの  
 滋養じやうやう物を與あたへて、獨立どくりつ自重じぢやうの精神せいしんを起おこさしむるやうす可べし、左ひだりれを爰こゝに  
 組長くみちやうの最もつとも注意ちういす可べきとあり、即すなはち信者しんぢやの固とこより貧富ひんふ無差むさ別べつ主僕しゆはく平等びやうどう  
 にして神かみの前まへに同おなじく兄弟けいだい姉妹しまいなり、雖いえども左ひだりりどて俄はなかに貧みし  
 き者ものの高たかぶり、長者ちやうぢやに對たいして漫またりに兄弟けいだいなり、姉妹しまいなりと思おもひしめ、傍若ぼうじやく  
 無人むじんの振舞ふるまひあらむむるのいと苦くる々々しき事ことなり、組長くみちやうたらん者ものの克よくく此こゝ  
 邊へんのことに注意ちういして、彼等かれらをして卑屈ひくつせしめざる、同時に又また高慢かうまんに

流ながれざらしむるやう導みちびく可べし、要もとに主しゆにありて誠まことに自尊じそん自重じぢやうの心こころ掛かけ  
 を持もつやう教けうへ込こむにあり、

第八章 組長の取扱ふ可き各種の信者

其二

第四、病者——講壇に立ちての滔々悪河の辨を振ひ、天晴成効の牧師と見ゆる者が、實際信者の間に其受け甚だよろしからず、僅に暮年にして轉任する者あり、これに種々原因あるべしと雖も、多くの牧師が獨り己れの嗜める讀書などに耽りて、會友の訪問を怠るにあり、殊に疾病憂患の者を音づるゝを怠るにあり、博士アバムの牧會學の講壇に於て其學生に勸告して云く「青年紳士諸君よ、諸君の教會員何某の家に病者ありと聞かば、縦令讀書の半にせよ、勉強の蔗境にせよ、待客懇談の時にせよ、客には其止みがたき由を告げ、百事を抛ちて直ちに其病家を音づる可し」と、牧師の職既に然り、牧師を助くる所の組長ひとり然らざるの理由あらんや、

ウエスレー組長の職掌を解釋して曰く、「彼は其組員に面會し、其出金を受取り、又其病のうち疾に疾病にかゝれる者を訪問す可き職任あり」と、長吏會の第一問にも病者ありやとあれば、組長の克く其組のうち病者のあるや否やを注意し、若し之あらば速に訪問して、委曲を牧師にも告ぐ可し、

組長と病める組員との間柄の親密なるは、牧師と會友との間柄に劣ることなし、嚮お壯健なりし時に、常に往來し、毎週組會に於て其祈禱を聞き、其獎勵を受けたる者が、一朝病床に打ち伏す時に、苦痛のうちにも其日頃敬愛するおのれの組長を見まはしく思ふの情切なるに至當ならずや、組長たるもの争でか此憫れむ可き病者の希望を満足せしめずして可ならんや、

或る教會に一人の組長ありけり、組會毎に其會員簿に缺席のものを「欠」

とざるし出席の者を「出」と記し、嘗て一度ひもろの何故に「欠」なるやを取調べし事なし、而して「欠」なる符號の幾個となく重なりし時、之を牧師に示し、毎會此の如く組會に欠席する者の、宜しく之を除名せられたまふと請求せり、然るに牧師の沉着おして用意周到なる容易お之に同意せず、除名の何時にても造作なく出來うることをゆゑ、先づ其缺席の原因を尋ねに訪問す可しとて、頓て組長と同道し其「欠」と記せる家々を訪問せり、然るに何ぞ計らん彼等の多くの老衰して外出の叶はぬもの、若しく病床に呻吟する者等にて、彼等の信仰の確實に、常に教會の牧師および組長のため日夜祈禱し居るものなるを發見せんと、若し此組長にして其組員に親切ならんに、「欠」と記さずして、「病」とざるすべき筈なりし、

病者を訪問するお熱練を要す、病人の體力疲勞し、精神過敏にして、瑣

細の事物をも氣おかけ易きがゆゑに、其病室お入るや靜かみ跡して音を立てず、其動止の從容温雅ならんとを期す可し、或は漫りに口喧しく彼是れと室内の万事に喙を容れて之を指圖す可らざるの云ふまでもなく、高聲に語るが如き亦頗る不可なり、或は情迫りて涙の溢れ出でんとする如き場合にも、自ら制して慟哭するなかれ、病者最早や終焉に程近しと知らば、尙更ら周章して粗忽の振舞ある可らず、宜しく善良なる常識の是認する方法を以て、うの將に死に瀕するを告げ、且つ其境遇に適當なる聖語を靜かに讀みさかす可し、此世に頼みなき病者に取りては神の御言葉はと難有なし、左るを若し事實を偽りて不日全快すべしと、一時の氣休めを云ふの親切に似て、其實親切にあらず、

總じて病人の訪問者の、憂愁の狀を顯はす可らず、縱令危篤の病者にして、其生命旦夕を計らざるも、尙は勉めて歡容喜色を示す可し、

訪問者の病室に心なく長坐す可らず五分乃至十分にて足りぬ可し、  
 而して病室を立ち去る前に其枕邊ありて病者のために祈禱する  
 と敢て不可あるにあらざるも其病氣の性質によりての差扣ふ可き時  
 あり又然らざるも決して長き祈禱をあす可らず音聲靜かに語簡にし  
 て其意を盡す用心ある可し、  
 肺患の如き病人に一回なり二回なり定時に訪問す可し而して  
 訪問の折りに僅かありとも時節の美しき花あど贈るあど極めて善  
 し是れ訪問者の去りし后らにも其芳志の長く積郁として室内に馨り  
 病者のさびしき心を慰むること如何ばかりあるやを知るべからざれ  
 ばあり、  
 第五愛患ある者——人の偶々喜樂あれば之を表すに微笑を以てす  
 然れども心の苦痛の之を内につとみて、之を他に洩すを憚るもの滔々

皆然り、晝の嬉々として談笑の間に暮らし心のうちに更に懊惱のあ  
 りとしも見えざるも、哭く者の室を求む、彼の『よなく床をたふしは  
 せ涙をもて彼が衾をひたせり』  
 『婦の産む人の日の少なくて艱難おほし』と古人の語にたがはず、  
 愛患の人生の常なり、予輩試みに聖書を読むに、其記事の最も著るきも  
 のの愛苦艱難のことあり、其歴史に於て、其傳記に於て、其經驗あ於て、教  
 訓に於て、約束に於て、主として愛患のことに關せざるいなし、ヤコブの  
 嘆きて、『我齡の日の僅少あして、且悪かり』と云ひ、パナの流涕して、『我  
 のわが愛と悲みの多きよりしてかたれり』と云ひ、エレミヤの、『我の  
 艱難に遭ひたる人なり』と叫び、ヨブの、『我面の泣で顔くなり』と云  
 げき、イスマエルの詩人の神に向て、『なんぢの波なんぢの猛浪ことど  
 どくわが上をこえゆけり』と云うたへり、『彼の墓を往きて哭ならん』と

ハ、ペタニヤのヤリヤが事ならずや、『勞苦のかれ屢を寝ず飢渴をばし  
 食を絶ち凍裸なりし』とは使徒パウロの實驗あらずや、『爾曹世に  
 在ての患難を受ん』との基督の仰せならずや、左れば組長の重なる職  
 任の憂ひ悲める者を慰むるに在るを知る可く、神の『なくさめよ、汝等  
 のわが民をなくさめよ』との御聲を謹聴せざる可らず、  
 蓋し愛患の原因にも種々あり或の愛人を失へるもの或の商賣に失敗  
 せる者あるひに職任を解れたるもの或の疾病に罹れる者或の家族の  
 風波ある者は是れ皆組長の慰さむ可き者なり而して慰藉に欠く可らざ  
 るもの同情なり、慰藉の使ひ悲む者と共になし、喜ぶ者と共によ  
 ることよ、  
 組長の組會を以て愛患者の避難所となす可し、其祈禱、其唱歌、其訓誨、其  
 獎勵の皆倒れんとする者を克く起たしむ可し、別けて心氣の沮喪せる

者を奮發せしめ、之に向て將來の希望を吹鼓す可し、  
 或人は基督教の讚美歌を難じて、餘りに厭世的なりとなし、『天國』と  
 か、『死の河』とか、『輝きの陸』とか、『浮世の旅路』とか、總て悲哀的の分量  
 割合に多きに過ぐと云へり、然れども是れに一理あることなり、畢竟  
 するに斯る讚美歌の廣く行ゆるは、人心の苦痛おほき所以にして、  
 を責めての唱歌によせてなりとも神に向て叫ばされば満足すること  
 能ひざるに由れり、ナイアガラの瀑布は堰どめうるも心の底にひろめ  
 る苦痛のおのづから流露するは、人力のえて制すること能ひざるもの  
 なり、

みのうさつらさむ      わがためまのふ  
 イエスこそよなき      われのともなれ  
 こころのおもひを      もれずいのらで

やすまのさちをぞ

なごさるわれの

まごろにかよれる

なやみのくもよ

きみにいのりて予

はらいさるべき

いともどつたのめる

いそぎみならで

たれかいたはる

わがうきときも

ちりのうきよころ

ことしげくわれ

のがれていのる

きみのほかなし

たのむよのどもに

なみせらるるも

きみのみもところ

なぐさめあらめ

第六、信仰の躓ける者——信者は罪を犯すまじき筈なり、又犯さる可

らざるの理由あるなし、然れども理論は倍て置き、之を多数の信者の實

験に徴するに、事態實に悲む可き者あるを如何にせん、殊に大なるイバ

イバルの時など、卒かに信者となりし者の、舊來の悪しき習慣を盡く打

ち勝ちしかの如く思ひ、百戦百勝向ふ所敵なきの感を抱くべきも悪魔

の伏兵の突然として思もよらぬ途の邊より躍り出で、以て、彼を襲撃す

ることあり、然るに悲ひ哉、斯る信者は經驗の日尙は淺く、悪魔の詭計を

熟知せざるが故、直ちに失望して、安息日の禮拜の更なり、組會にも絶

えて出席せざるに至るべし、是時其組の長たる者、取敢えず彼を訪問し、

之を慰藉し、奨励し、訓戒する所あらんに、直ち立ち返り、善き信者と

なり、更ふもど來し天路のつくとを得べきも、若し其儘お捨て置き、願み

ざる時の難に如何はと感化の有様の著しかりしもの、おもせよ悔改せ



ざりし以前と差程の相違なく、否な却て前より悪しき有様にも陥りぬ可し新たななる信者の宛も歩み初めの小兒の如し其歩武蹠蹠として定まらず、屢々蹉跌すべけれども其を起して之が手をとり導く者は即ち組長の任なり、蹉跌の固より願はしき事ならざれども小兒の足の弱きを思へば、寧ろ之を憫まざる可らず、誰か初めよりして數里の道を獨歩しえしものやある、

牧師の之が挽回れ方法を講せ可きの勿論なりと雖も其組會と特別に親密なる關係有する点より云ふと、時に牧師と雖も或点に於て其組に及ぼさるることあり故に此の大任ある組長たる者の基督に御精神を奉體し、難あき九十九の羊を後にのこして其失へる一疋の羊のため荒野をさがしあるさし、善き牧羊者にならざる可らず、何時の頃にも、ニ、ユ、ヨーク州のチャルシー、シチーとてニ、ユ、ヨークの都

會に隣れる地に信仰復興のありけるとき、悔改めて信者となれる者一人ありけり彼のニ、ユ、ヨーク市の或商店に簿記役をつとめ日毎に通勤してゆたかに暮らせり、然るに彼の元來酒を嗜みけるが組長の心を附きし頃まで、能く禮拜を守り常に組會にも缺なく出席せり、其の都合により家族引纏めて都に轉住せしが、數月にして彼が酒癖再燃しうれがために身を誤り産を失ひ、妻子の路頭に迷へるよし言ひ傳へられぬ、依て組長の直ちに渡船場を渡りて、ニ、ユ、ヨークに行き彼の許を訪ねあてて云く、「御身若し再びチャルシー、シチーに立ち戻るとならば、我の御身と其家族のために宿る可き場所を周旋し而して御身が相當の職業にありつくまで、我の見つぎをせん、我は御身を助くるために來れり」と此親切なる組長の言葉の爲め神のありがたき仰せ言を傳ふる天の使の言とも聞え、遂に此組長の愛心によりて其信仰と共に靈

魂も家族も皆すくはれ、後ちには忠實なる教會員となりて、長く道のた  
 めに善き働きをなせしといふ、  
 幸にして此組長の其心がけの奇特なるのみならず金銭にも不自由の  
 なかりしかば、斯くの人を救助しえたれども、這の凡ての組長の倣はん  
 と欲して、ならふ能はざる所然れども學ぶ可き其心掛けなり、基督の  
 御精神なり即ち「わが来るの義人を召く爲めに非らず、罪ある人を召き  
 て悔改させんが爲なり」『うれ人の子の亡たる者を救はん爲に來れり』  
 或る組長の宛も潔癖なる主婦が、朝より晩まで箒と拂子を携へ室内の  
 隅々残りなく掃除して、毛ほどの塵をも、どよめざらんとするが如し、勿  
 論清潔にましたることなしと雖も、斯くての毎日師走の煤掃したら  
 んやうにて、常の大切なる用事をも辨理するの暇なかる可し、  
 教會の目的の悪しき信者を放逐するにあらすして、之を善き信者とな

すにあり、大海の其流れ入る總ての水を化して之を塩となすが如し、然  
 りと雖も彼の徒らに教會員の數多ならん事を思ふて、教規の取締をお  
 ろうかにするもの、我輩の與する所にあらす、  
 組長が躓ける信者を訪問して、其信仰を引戻さんとする時、折よく其人  
 ひどりに面會をうればよし、左なくは店頭にて談話もならず又他の家  
 族の面前にての組長より打ち明けて問尋ぬることの叶ぬ場合もあ  
 り、故に此の如き時には之を手紙に認めて贈るもまた一策なり、蓋し書  
 翰を用ゐるの更らに新奇の事にあらす、使徒パウロの時代の云ふまで  
 もなくウエスレーもサシマフールドも、亦全じき方法を以て大に功を  
 奏せることありき、  
 敢て組長の責任を他に負いせんとしにあらす、然れども場合によりて  
 の組長自ら先き立ちて勸むるよりの、反て其人と境遇および教育等の

あまり隔りなき、相當の組員の一人をして説諭せしむるの可なる場合  
 あり、或る教會一人の信者ありけり、彼の其教會にて重なる會友の一  
 人なりければ、人皆仰ぎて教會の柱石と頼めり、然るに彼の絶えて組會  
 に出席せしことなし、或る日のこと、同じ組の會員私かに彼を訪ひ、親切  
 に彼の組會に出席せざるは、多くの弱き信者の躓きとなれる由を告げ  
 けるに、彼れ其眞心より出でし勸告を聞き、爾來組會に人先ち逸早  
 く出席するは、その精勤家となりしといふ、  
 是れ只一例に過ぎざれども、組會員同士互に親切に導き合ふことは、時  
 として組長の職務的嚮導にまさり、利益の勤からぬ事あり、  
 人數の都合により組長の下に、更に補助組長を置くも可なり、又婦人の  
 組には婦人組長便宜おはかる可し、男子にては時によりて遠慮せざる  
 可かざる事あればなり、男子の組に男子の組長を要するの云ふまでも

なし

第九章 組長訪問の心得および小児の組

牧師が訪問を怠り、只講壇の説教のみを以て牧會するのたがひ、尙ほ組長が單に儀式的の組會のみにて、其組員を監督するの覺束なきが如し、諺に云はく「會友の家を訪ふ牧師の、教會に出づる會友をつくる」どかや、然らば組員を音づる組長も亦組會に出席する組員をつくること云々とし、

古來牧師の失敗甚からざるも、其原因多く、此緊要なる訪問の一事を疎かにするにあり、勿論組長の如く多くの時を費し、多くの家々を訪問する能はずと雖も、其人員の少數なるにより却て牧師より一定の人員を屢々訪問するの便宜を有し、或點に於ての牧師よりも一層深く其家族にまで親暱して、其様子をも知り得る機會多かる可し、予の左に牧師の訪問の心得にして、組長にも亦應用し得べしと思はるる條

條を示さん

訪問の目的——組長の訪問の保養にあらざる、又辭散にもあらず、然るを今日の終日店頭に坐して、對客の應接にいうがごとしく、頭痛堪へ難ければ組員にても訪問して此辭を遣らんとする組長ありと假定せよ、斯る組長の争で熱心誠實に其會員の信仰の安否を尋ねることを得んや、組長若し人を訪問せんと欲せば、疲勞後の捨て時間を以てせず却て何時か都合よき折を作り、うの精神のさわやかなる時に於てす可し、業務の多忙にして懶さを覺え、速に杖を野外に曳き、新鮮の空氣を呼吸するに如かず、名を訪問にありて、明に他人の門を叩く、寧ろ無禮なり、組長の訪問の社交的享樂を目的とするにあらざる、組長の固より交際の廣き人にて、教會員のうちにも、彼が特別の親しき友のあり得べき、尙ほ基督に三人の弟子ありて、其が中にも一人特別に親しかりしが如く

なるべし、然れども組長の親友を音づれて四方八方の閑談に一日を消  
 するに、組長の訪問といふは、蓋し組長の訪問の訪問に、  
 て、其家族の靈性的導師となり親しく信仰上の話をなし、病者あらば之  
 を効はり不幸あらば之を慰め、常に朋友として訪問するのみならず、組  
 長として訪問せざる可らず、  
 訪問の利益——組長の其組員のうちを訪問し廻るにより、組會のため  
 有益なる活問題を發見し、其勸めの言葉を以て乾燥なる理論を避け、現  
 實なる經驗談たらしめ、且つ其同情をも廣からしむ、又親しく人々の性  
 質と其信仰とを辨知するにより、大に自己の心を鼓舞し併せて真理の  
 活ける新光景を観察せしむ、故に訪問の他を益すると同時に、神の恩寵  
 我にも加はりて、みづからも亦大に益する所ある可し、  
 組長の訪問によりて、一層組員の信用と尊敬を得可し、牧師が講壇の説

教の、左までに數多の人心を悦服せしむ可しとも思ひされど、聽衆の呆  
 然我を忘れて謹聽するに、是れ其人の云ふ所を聽くより、寧ろ其人自  
 身を聽くが爲なり、組長にして克く組員の信用を受けなば、組員の心  
 みな組長を中心として結びつき、組長の言葉に大なる力あるものと  
 なる可し、  
 訪問の方法——訪問に厳格なる方法を設けて、千篇一律なるべから  
 ざるに、宛も朋友問安の往來に一定の規則なきが如し、宜しく時と場合  
 とを斟酌して、臨機の方法を用ふべし、然らざれば全く機械的の訪問と  
 なりて其効用を失ふに至らん、  
 或る牧師の豫め何町へ何日に行き、其節讀む可き聖書の何の何章な  
 りと廣告し、而して其當日に行きて其聖書の意味を問答す、是れ宛も巡  
 回試験者の如くにして、訪問としての効用の疑はし、

組長の訪問の忠實に爲さる可らず、或の最初に氣の進まざることも  
 わらんかなれども、勉めて止まざるに於て、遂に厭ひしからざるに至  
 り、又寧ろ之を樂しむに至らん、  
 思ふに多年傳道せられし牧師先輩のうち、種々なる經驗あるがな  
 かに、信者の家々を訪問する時は、一日數時間に様々の取扱をうく  
 ること、いあらざるべし、  
 或時の天の使にても降りたらん如くに迎へ入れられ、「牧師様に能  
 くころ斯る茅屋を見舞はせられたれ」と主人先づ之を勞らひて廳へ  
 上坐に請すれ、細君又會釋して、「山茶ながらも喉をうるはさせ給へ、  
 左ころ御暑く候へめ」と背びらおまはりて、團扇もておふぎ「今年の  
 果實の當りみや、背戸なる畑の西瓜も、よくみのり候へ、小兒等よろこ  
 びて、其うち最も大きなもの、牧師様に御眼にかくるまで、手を觸れ

すなと申合せ居候」などいふ言の下より、長男逸早く鬼の首でも取り  
 たる如く、みづからちぎれる益大の西瓜を、力自慢にもち來り、次女もほ  
 められたさに、眞魚板に庖丁を持って出づれば、母親の微笑の内に、「うら  
 せぬもの、牧師様ゆるさせ給へ、此子供等の無作法なるを」と云ひ、庖  
 丁取りて、西瓜を兩つお割り、一家の丹心を顯はしが、ほなる赤き肉を饗  
 せんとせん、斯る親切なる待遇をうけたる牧師の、長途の疲れも暑熱の苦  
 みも拭ふが如くお去り、精神最も壯快を覺へ、恰かも彼の基督がベタニ  
 ヤの村お宿らせ給ひし古事なと思ひ起し、ペテロならぬと、心のうちお  
 の、「我儕こゝお居るの善し」と叫ばざるを得ざるならん、  
 嚴めしき門構えと、玄關の作りより推察すれば、此家の主人は世の所謂  
 る金満家か、左なくも何か肩書のある者なる可し、今しも教會の牧師は  
 此家族を訪問せんがためお來れり、「應」といらへて、取次ぎお出でたる

下女の内ふ入るや、『また来たか五月蠅奴だナゼ御留守じやと申さなんだ』と叱かるが如き低き聲の洩れ開えてより、小半時間も待たせられたるのち、ヤラ襖子をわけ、黄八丈の襦袢を、白縮緬の兵兒帯をしめ、片手お吸ひさしの巻煙草をもちて出でたるは、此家の主人なる可し、其傲然と坐つきて、麩々たる頬鬚を指頭もて捻りつゝ、牧師と談話をなすを聞くお、言語毫も禮節なく、或は教會の不平を鳴らし、或は信者の小言を并べ、兎角その内細君も此談話の半をこころお出で來りて、是又碌々挨拶もせず、側らより主人の言葉お相槌うち折々の滑らかなる舌もて、唇をぬめらし頻りお彼れが組長を冷評すとせん、斯る不親切の席に、牧師之宛がら冷水を潑ひせかけられし心地すべく、折角訪問して、其信仰を獎勵せんと思ひし元氣も、抜け、不信者よりの冷遇の尙ほ忍ぶ可し、教會の信者より此の取扱を受くるの意外なりと怒氣勃として抑ふべ

からざるものあらん、然れども經驗ある牧師ならむ忽ち心づきて、ア、我れ誤てり誤てり、我の斯る憫れむ可き人々を教えんがため、神の召しを蒙りたる者おあらずや、我は斯る人をも導きて神に至らせんがため、尙一層の信仰を得まほしと思ひ返へし心のうちに我身と其人のため、黙禱して其家を出づるともあらん、斯る傲慢無禮の信者に對しては、教會にても其所置お究し、幾度か役員會の議お上り、斷然の處分お出づべしとの議論も出で來らん、而して牧師今暫らく猶豫す可しと勸めん、果然神の罪人を棄てず、リバイバルの大恩雨お霑ひ、其品性全く一變して、教會のうち尤も善き信者とならん、是れ牧師が祈禱と忍耐の結果なり、以上の二例の假設おして事實おあらず、然れども教會の多き、信者の一ならずる中お、多少之お似よりたる事柄の是なきおしむあらざる可

し、既すでに教師きょうしをして時ときお新かたる待遇たいぎを受うけるとすれど、組長くみちやうも亦また數かずおはき訪問ほうもんのうちお甚はなはだ快こころよからぬ事ことおも遇あふ時ときわらん、左ひだりれど、

みのうさつらさも

イエスころこよなき

ころろのおもひを

やすきのさちをぞ

ころろおかされる

きみおいのりてぞ

ともどぞたのめる

たれかいたる

わがためしのぶ

われのともなれ

もれすいのらで

なごさるわれは

なやみのくも

はらひさるべき

イエスキみならで

わがやむときも

ちりのうさよごう

のがれていのる

たのむよのとも

きみのみどころ

ことしげくわれ

きみのほかなし

なみせらるるも

なぐさめあらめ

組長くみちやうたるもの之これを唱なして以もつて自みづから慰なぐさむる所ところあれ

組長くみちやうの訪問ほうもんの儀式ぎし張はらすして真ま心こころよりせざる可べからず、狎なれて禮れいなき、

忌いのしど雖いへも、左ひだりれど、常つねに嚴げん格かくお過すぎ、組長くみちやうと組員くみんの間に高たかき城じやう壁へき

聳そびえ、近ちかき難がたさも益えきなし、又また組長くみちやうの訪問ほうもんに先まち、其その組員くみん中ちゆう深ふかき教け育いくなき人ひと

に對たいしても、自みづから自由じゆうに談だんじ、容やす易いに語かたり得える如ごとき事こと物ものを準じゆん備びす可べし、或あるる牧ぼく

師しの自みづか己この好このめる事こととて、午ご前ぜんに書しよ齋さいありて、思し辨べんせし哲てう學がく上じやうの信しん僣ぎん

難なん解かいなる議ぎ論ろんを會かい友ゆう訪ほう問もんの時ときお提てい出しゆつし、之これを對たい手てとして、其その論ろん憑びやうの強きやう弱じやく



を定めんとせり、是れ無鉄砲の甚しきものなり、  
 組長の訪問の總じて短時間なるをよしとす、勿論場合によりての充分  
 長坐し諄々として懇談せざる可らざる事情の時も是れある可し、雖  
 も通常凡う十分乃至二十分長くも三十分過ぎざるやうにすべし、  
 みだりに家族の様子をも察せず、其場合をも斟酌せず、日脚の短き秋の  
 日おも、冬の支度忙しき時にも、悠々居すりて動かすんば家人の如  
 何ばかり困却すべき去らばとて打ちも捨て置れされば、左りげなく之  
 を待遇すべきも、所謂是れ難有迷惑にて、此後牧師の足音を聞く毎  
 眉根をひりめて安らぬ思ひをなすにも至る可し、  
 訪問の時、暑寒の挨拶や、世間の雑談等にて終らんと甚だ残念なり、宜し  
 く宗教的なる可し、然れ共此に宗教的と云へるの、術語的を意味するに  
 非らず、組員の組長の私宅に訪ひ来てまで、組會の席の如く其談話を感

話めかすを片腹痛く思ふ可し、之を是れ察せず何時何邊にても敬虔な  
 るの人をして嘔吐を催さしむる基なり、立德建信の談話の説教らしか  
 らずとも語り得可きと知れ、  
 常識を以て必要なりと思ふ場合に、組員と共に祈禱するも不可なし、  
 然れども、訪問のとき、必ず祈禱す可きもの、如くに心得如何なる  
 場合にも、強て押付けがましく祈禱せしむるの、害おほくして益寡し、注  
 意すべきことなり、若し組長おして人と共に祈禱せんと欲せば、先づ其  
 組員の家に到らざるに先ち、獨り我が家に在りて、其人のため祈禱す可  
 し、斯くて後ち訪問の上、其場の様子により、彼れと共に祈禱するの善し、  
 斯くせばかの共に祈禱を捧ぐと云へる事柄に重きを置き、突然勸めて  
 祈禱するよりの遙かに優るべきを以てなり、  
 或る教會にて、組長の訪問の時に、傳道金をも集るの慣例あり、是れ

組長をして少なくとも毎月一回組員を訪問せしめ同時に傳道金をも集  
 ることゆへ一舉に兩得の如く甚だ都合よきに似たれども又時として  
 の傳道金の催促にでも廻りたる如き感を抱かしめ甚だ面白からざる  
 ともありと聞けり、  
 元來組長の、組會の時に金を取集む可き筈なるも今何れの教會にて  
 も其を必然の規則として實行せる所は是なきが如く或の豫約金の封  
 筒に入れ其上に姓名年月を記して之を會堂備附の傳道金函に投入す  
 るあり或の直ちに之を會計に手渡しするあり何れにしても是等の皆  
 多く會計局の方法に屬する事柄なるを以て此の細かに之を述べ然  
 りと雖も只組長が信者の金錢を取扱ふ時に其計算受取りを明確に  
 し假初めにも手落ちのなきやうせざる可らず或る組長の組員より會  
 堂建築金として五圓の金貨を受取りしが如何しけんろを途中にて紛

失せり然れども此辨疏の他をして從服せしむるも足らず爾來の  
 の身の上あり一種の黒雲庇ひかゝり誰とて心より之を信任する者な  
 きお至りしといふ、

小兒の組

我教會の信奉する所によれば小兒は恩寵の有様にある者即ち義とせ  
 られたる有様に居る者なるが故に正さにバプテスマを受くる資格あ  
 るものなりとす使徒パウロの羅馬書第五章の十八節に論じて「是故に  
 一の罪より罪せらるゝことの凡ての人に及びし如く一の義より義と  
 せらるゝ生命を獲ること凡の人に及びべし」と云へり故に凡ての小兒  
 も基督の贖罪により神に對しての義とせられたる間柄をもてる者な  
 り、  
 又新約のバプテスマとも見るべかりし神のアブラハムに結ばれたる

契約の印證の、小兒にも亦施されたるものなり、  
 或る論者の新約聖書に、小兒領洗の事實なきを説くと雖も、這の只直接  
 に之を明記せざるのみにて、使徒行傳十六章の十四、五節にあるルデヤ  
 と其家族の領洗、同章廿五より三十四節にあるピリピの獄吏と其家族  
 の領洗、哥林多前書一章の十六節にあるステパナと其家族の領洗に、  
 小兒の含有し居りしに當然の事にして、而かも此に家族と譯したるの  
 父母と小兒とを包括する「オイコス」なる唯一の希臘語なるを記憶せざ  
 る可らず、  
 之につきての尙ほ詳細に論ず可き點おはかれども、這のまた自から他  
 の議題に屬するを以て、此に唯小兒も神の國の民たるを得るが故に、  
 皆バプテスマを受くることを得と云ひ置きて満足せん、  
 左れば教會にての大人を管理するが如く、此小兒をも監督す可く、殊に

バプテスマを受けたる幼兒の姓名は勿論のこと、其生誕の年月、領洗の  
 時日および父母の姓名、住居等をも詳細に取調べて之を一の帳簿に記  
 載し置くとの、牧師の職分として條例に明示する所なり、  
 牧師のバプテスマを受けたる小兒のおほよ十歳に至るものを分ち  
 て組となし、其組毎に一人の組長を置く可し、而して其組長たる人の、男  
 子ならんよりの、寧ろ婦人を擧ぐるを以て可なりとす、婦人にて成る  
 可く愛嬌ありて、既に人の母となり、現に小兒養育の實驗ある者なれば、  
 一層都合よかる可しと雖も、然らざるも生れつき兒煩悩にて、克く細き  
 事まで世話の行届きて、小供等のおのづと馴染み易き人なれば、前者と  
 左まで軒輕する所なからん  
 是等の小兒を一堂に集めて毎週一次、組會をひらき、或時ハバプテスマ  
 の性質目的などを平易に説きあかし、或時ハ救の道の大要を面白く之

なし聞かすべし、是れ決して容易の事にあらず、小児の事物に退屈し易きがゆへに、勉めて集りの單調に陥らざるよう時々面白き話の間に、音楽唱歌などを雑へて語るの妙なり、予を嘗て或る所にて、一組百人をかりもありしかと思はるとはどの、小児の日曜學校を參觀せることあり、此の組の何れも七歳より八九歳位までの者にて之が教師は年若き婦人なり、其扮粧は華奢ならざれども、清くして品よく、其容貌は敢て美人と云ふべし、あられざれども、こぼるゝばかりの愛嬌あり、手に薔薇の花をいれたるコップをもちて塗板の前に立ち、今何かの話となし、折々の頭是なき小児が、辻褄の合はざる答するを聞き、驥然として打笑める風姿左ながら天は使の清くして美のしきが如くなりし、此教師の話の長くも五十分位にして、其間に調子面白き唱歌に手評

子をとりて氣を變じ、只管小児の退屈せぬやう工夫をなし、此組の小児十人位づゝの間に、別に一人づゝの女教師を坐せしめ、小児同士の雑談、いたづらな話をせぬやうに注意し居たりき、依て思ふに、小児の組會も成る可く、彼等のあきぬやうに趣向し、其信仰の如きも大人の如く組織立ちてこそ、典雅に述ぶるを得ざれ、小児の小児だけ、一種の神學を有せることなれば、然るべき組長之を導きて、其いとけなき時より素直に養成せば、將來教會に於て、天晴れのよき信者となる可し、組長の組會ごと、如何はせざるなりとも、小児より出金せしむべし、斯くせば小児の時より、善事のために、義捐するの美のしき習慣を覺え込むものなり、或組長の小児の稍年齢のたけたるものを、時々大人の組に列せしめて、

其經驗談を傍聴せしめ、大に彼等も、心靈上の利益を與へたりと云ふ、  
 未だバプテマスを受けざる小兒と雖も、組會の席に連らんと願ふ者あ  
 らば、歡で之を許すべし、而して組長の教會にて、未だバプテマスを受け  
 ざる小兒あらば、成る可く早く領洗せんことを其父母に勸む可し、或る  
 教會にて、毎年一度「小兒の日」を以て、小兒のバプテマスを受くるの日  
 と定め置けり之も一つの良法なれども、都合によりて、何時にても領  
 洗しうることを知らせ置く可し、

第十章 組會の妨礙

組會の妨礙となるもの多きなかに、其最も妨礙となるは、組長其人の組  
 會に對して冷淡なることは是なり、勇將の下に弱卒なしとかや、組長若し先  
 導者となりて會友を獎勵し、組會に出席せしむる時、如何に盛大なら  
 ざらんを欲するも、得可らざるべし、之に反して會友の缺席する者ある  
 も、翌日之を訪問して其理由を尋ぬることをせず、其組會に對する態度  
 洒々落落を關するが如く、關せざるが如く、或は余儀なく務めて、僅かに其  
 責めを塞くが如くなれば、其下にある組員の組會に對する興味も自か  
 ら薄らぎ、一回怠り、二回怠り、三回、四回果ては全く出席せざるに至るも、  
 又怪むに足らず、斯くても組長の尙ほ之を訪問することなく、而も直ちに  
 牧師に報告して、組會の出席を怠るもの某々等、何名なりといひ、以て  
 恬然たるものあり、ア、何ぞ不親切の甚だしきや、

組長の其舉止に心して宜しく熱心なる可し、然れども嚴厲なる可らず、宜しく正直なる可し、然れども頑固なる可らず、宜しく忠實なる可し、然れども酷烈なる可らず、總じて組長の振舞の温雅にして、克く人を懐け、之をして逆らしめざるやうにす可し、左ればとて其云ふ可きとをもえいはす、惡き事をも辛抱して、只管人氣を害せざらんとするの不可なり、なにかしの監督云へることあり、「數年前のことなりけるが、予は或組長の熱心組會を司りつゝありし時の事を思ひ起せり、彼の各會員順々に其信仰上の經驗を語る順序となし、甲乙次第を追ふて遂にある内氣なる若き女の感話すべき番となれり、其時此女の他の人の如く、直ちに起立して口を開く勇氣もなく、暫し羞らひて躊躇しければ、組長之を見てもどかしとや思ひけん、神は吠ゆることの出來ぬ癡の狗を、好ませ給ひざる可し」と云へり、然れども予は其時思へり、此の起ちもえわ

がらざる基督の可憫見よりの、彼の克く吠えし所の組長ころ却て犬なれども、組長若し親切なる心を以て柔和に、此方より問をかけて尋しならん、に彼の女の欣で信仰の有様をも答へしなる可く、又次ぎの組會にも出席せしならん、要は組長の萬づに愛心を失ひざるにあり、若し愛心をだに失ひざれば、時に或の直言をなす場合ありども、人之を聞きて其親切に感じ、又多少の過失ありども却て之によりて其人の誠心を見ん、組長たるものは人情に通せざる可らず、人を諫るに公けの席よりの、寧ろ私かなるころよけれ、何人あても稠人廣坐の前に責めらるるを好まじ、勿論組長の諫むること、尙は彼の慰め或の勵すが如く、其本分なりと雖ども、是非ども公けに諫む可きの規則もなく、又其必要もあるまじ、

監督チエンス曰く、「組會の室の美辭法もしくの雄辨術に、甚だ應けしき場所にあらざと雖も、其席にての談話の語氣の極めて大切なり。組會室に於る組長が十二人、二十人、或は四十人はどの者に語るの、彼の大將が戰場に在りて、其兵隊に號令を下すが如く、高聲を揚ぐるを要せし、斯く爲すの都合にして、其云ふ所をして無効ならしむ可し」と、組長の音聲の其室の廣狹にもよるべけれども、明快にして何人にも瞭解しうるものなる可し、

組長の勤めの餘り、くどくとして冗長にわたるは注意せざる可らず、且つ又組會其物も、亦餘りに時間の長びかざるを以て宜しとす、大概組會の時間は一時間に越ゆ可らず、出席人員の特別に多數の時にては、一時間半にて足りぬ可し、或組長は會員五十人にては、いつも一時間半に過ぎしことなし、或組長は出席組員三十名乃至四十名なるも、毎ねに

一時十五分間にて終れり、總じて長たらしき組會に利益あるもの稀なり、

會の漸く長びくにつれて、人々長坐に堪えず、氣倦み、體疲れて、活氣鈍ぶり、之を適當の時に切りあげて散會せしならんには、會員何れも聖火に燃やされ、また來ん組會の時をたのしみに歸りしものをもとの悔を貽すと往々あり、

組會の閑人の集會あらず、家政も忙はしき細君、商店を取締る番頭、復習も暇なき學生などの集會なれば、成る可く時間の閉塞も厳格おせざる可らず、初めの程の時間に遅れて來りし人への氣の毒の思ひおれども、斯ること二三會も打續けば、遂に彼の組長の時間を違えずとて、會友の方より時刻を固守するに至る可し、或る所に組長ありけり、豫て廣告したる時刻に到り見るに、未だ會友の

一人も出席し居るものなし、然れども組長の讚美歌をうたひ、祈禱を捧げて會を開けり、然るに尙ほまだ一人の來る者なし、此に於て組長の起ちて自分の經驗を語り、再び跪きて閉會の祈禱をなし、而じて靜かに家に歸れり、然るに會友の此事を聞傳へて、此後一人の時間に遅れて來る者なきに至れり、

組會を説教の終りしの中に催す組長あれども、斯る時に一層心して時間を堅く守り、長びかざるやうす可し、然るを或る組長の先づ長き讚美歌を朗讀じ、一節のこらす之を歌ひ、口上の行届きたる長き祈禱を捧げ、而してのち其日に聽きたる牧師の説教につきて、自分の所感を述べ、次ぎに會友に勧めをなせり、各會友も亦銘々小演説をなし、組長の一々之に五六分間づくの受答をなして、會の長さ遂に一時間半に互れり、斯ても己の演説を人に聞せんことを好む者、若しく閑暇ふして家事の

心配も何もなき者にて差支あかる可ければ、數多の人に迷惑此上あかる可く、其組會に出席する者の次第に減少するも無理ならぬことならずや、

- 或人組長に其會を衰微せしむるに、最も成功ある方法を示して曰く、
- (一) 『組長の定めたる時間の後ならでの組會に出席す可らず會友をして汝のため、十分乃至二十分は待たしむ可し、』
  - (二) 『組會に到らば成るべく長き句の讚美歌を、八節若しくは十節はど、オールド、ホンド、レッドの調子にて歌ふ可し、』
  - (三) 『跪きて祈禱を捧ぐるに、三十分ある可し、』
  - (四) 『教會に屬するを否とを問はず、何人にも之を組會に招き、各々其經驗を十五分間はどづ、語らしめよ、而して汝の一々之に向て短かき説教をなす可し、斯くて二三時間にわたらば、何人も組



『會に出席するを厭ふに至らん』

組長の組員に對して、彼れと是れとの區別を立て其取扱ひ振りに依估の沙汰ある可らず、組會の席などにて少しく富有なる者來る時に、俄かに之を上坐に就かしめ、何に吳れどなく愛想の言葉を云ひかけ、貧しき者の來る時に唯僅かにちるりと見て、願もて會釋するが如き、思ひしき事なり、人に氣の附かずとも、其貧しき人の心には、乃もて剗らるゝ心地しぬ可し、彼幸にしてよき信仰あれば、差したる躓どもなるまじけれども、多くの者のうちに、或は金錢を所持する多寡によりて、斯る心外の目に遭はんより、寧ろ組會に出席せざるこそ心安ければ、て躓く者のあるやも計りがたし、

組長の組長ぶる可らず、組長らしくせよ、組長と云へる貴き職分を振り翳して、己よりの智識あるもの、經驗あるもの、其他多くの點に於て己よ

り勝れたる人のあるをも憚らず、人もなげに大言壯語を吐き散らし、揚々たる如く見ゆる醜の極なり、苟も牧師の任じて組長に擧ぐる程の人ならんに、斯る杞憂のあるまじき筈なれども、人の誘惑に罹り易きものゆえ、如何なる過失のあらんも計りがたし、萬一組長其人の心にもあらで、僅かの放心より、斯く他人の誤解を招くに至りては、實に口惜しき限りにあらずや、

組會の會堂にて催すの外、信者の家々を順次にまゐるもよし、左れども餘りに廣き部屋に、あたりに氣の散りて互に親しき情の移らぬものなり、又餘り花美なる室に、何となく窮屈の思ひせられ、打解けて感話なぞの出來ぬ恐れあり、組長に、よく此邊にも注意せされば、組會の盛大

得て期す可らず、  
信者の家にて順番に組會を催すとき、其教會と其土地の習慣によりて

茶菓などを出す所もあり、此の強ち制す可きことにもあらず、又尤も可きことにもあらず、或意味に於て、寧ろ賛成す可き事なり、然れども是れとて常に組長の程よき注意なき時に、切角有益なる心算上の感話を終へしものち、更らに浮世の茶話となり、世間の新聞流行着の評判果ての詰らぬ他人の噂などして、只ろれなりに散會するに至る恐れあり、全体茶菓を出すの我國の禮にて、云々組會の番に當れる主人が、おのが家に來會せる人々に對し、聊か其謝意を表し、併せて親睦の興をも添ゆるの媒介たらしめんとするにあり、然るに較もすれば、組會の主意を忘却して、初めの煎餅位にてすませしものを、後ちふの蒸菓子となり、汁粉となり、壽志となり、鰻飯となり、會員互ひ競ひわいて、取りなしを氣張り、遂に組會との名のみおして、其實饗應會に流るゝ弊なしとせず、饗應の固より悪しき事あられぬと、彼のベタニヤの姉妹の事をも思ひ比べ

よ、故に友を招きて馳走せんとなら、初めより其由を告ぐる方よろしかるべし、若し止むなくの同席同時に、組會の組會にて終り、而して更らに改めて催す可し、組會の席を混用するのよろしからぬことなり、或所あて來過おは我家にて組會を催すは、順番なれども、茶菓の準備は行届かざるため、且つ前過某家、如くよき茶菓を供すること能はざるを耻ぢて、思ひ止まりし者もあり、是等みな組長の心得居る可き事なり

第十一章 司會の方法

如何なる善良の制度と雖も之を實際に應用するに當りて、其方法の宜しきを得ると然らざるにより大なる相違を生ずるものなり、又同じ善良なる方法にても之を適用する所の人々の見込によりて、其間自ら多少の相違あるものなり、組會を司とせる方法に於ても亦然かなり、其大主意の條例にも記載せられたれど、之を何如にして執行するか、一段に至りては、専ら組長の見込に任せざる可らず、而して先づ組長の見込みを以て、最良の方法を行ふに當り、缺く可らざるもの、司會の精神なり、其精神にして一度び活くれれば、其方法もまた活く、而して其方法活くれれば、勢ひ自から變化を生じ、變化の組會に興味を添ふ、或る組長の組會に出席するに當り、先づ獨り密室にありて神の前に跪き、組會の名簿を開きて一々其組員の爲め祈禱を捧げしことを一度な

らず、家族の者の見止めしとありと云ふ、然るに此組長病没の後ち、其組員名簿を取調べたるに、會員銘々の信仰の有様をも、其姓名の側、附記しありしと云ふ、宜べなり、此の如き組長の下、ある組會の盛大になりゆきしとや、沈思黙考の人の容易く口を啓かず、而して物云へば必らず意味あり、組長の一言一句たりども、輕々しく語る可らず、神速ある答辨よりの寧ろ安全なる答辨を與へよ、伶俐ならんよりの寧ろ莊重なる可し、而して組長の毎週絶えず組會の司會をさして有益なるすゝめをなすべし、決して容易の事、あらず、彼の其材料をうるに、宛も礦夫の金銀を人知れぬ山間より掘出すが如く、一つをえては復た忍耐して他の一つを掘さる可らば、聖書の眞理の路傍の砂礫の如く、怠惰者のたやすく拾ひ取ること能はざるものなり、

組長の斯の如き精神を以て其組會を開くお當り場合お適當なる調子  
 と文句の讚美歌を廣告し、長くも之が二三節を謠ふに止む可し、而して  
 祈禱の組長自身おても、又折ふし、他の會員おても、組長の見て適當な  
 りと思ふ者お依頼す可し、而して其祈禱の餘りに急ぎて短くす可らば、  
 左りとて餘りに長きも又よるし、からず、祈禱のうちおの少なくとも讚  
 美告白信任祈願等の要素なかる可らず、而して其祈禱のうちおの管に  
 出席者のためのみならず、欠席者のためにも、又會員の家族、疾病、困難、誘  
 悪などのためにも祈禱するのよし、偶々其席に新らしき信者、若しく  
 特別の事情の者おらば、特に其人のことも、込めて祈ること肝要なり、  
 要の組會の祈禱の組會の祈禱なるがゆゑに總じて組會に關係ある事  
 柄につきてのみ祈るべく、其他の事柄、別の時、於て祈るころよけれ、  
 何予必らずしも組會の席に於て祈るを要せん、

祈禱の終りしの中に再び適當なる讚美歌を二三節歌ふもよし、然ら  
 ずして直ちに聖書の數節を朗讀するも亦可なり、而して其朗讀せし所  
 を力あらしめんがため、簡單に説明を加ふれば、更らに可なり、是れ他の  
 會員の感話のために嚮導となりて、其路を開くべければなり、若し組長  
 が自己の經驗につきて語るが如き場合に、其言語の勉めて謙遜にし  
 て簡單なるべく、長くも十分に過ぐ可らず、而して其語る所、他人と意  
 見を異にせる神學上の議論の如きものに亘らざるやう謹む可し、  
 予の嘗てオハヨのデラワヤに在るや、其地の勢力あるメンヂスト教會  
 の祈禱會に出でしとあり、司會者お勸めをなすに不準備なりとて、彼の  
 教授ドラモントの著なる、『世界最大の物』を三十分ばかりも朗讀せ  
 り、而して后ち歌をうたひ、おます所僅かに二十分に過ぎず、斯くて二人  
 は、祈禱し、一人感話しければ、其れにて時刻來れり、とて散會せしこと

あり、這の祈禱會にして組會におらざるもの、司會者一人にて他人の祈禱感話の時間を奪ふの、方法の宜しさをえたるものにあらず、組長が會員の經驗を語らしむること、組會に於ける最も大切なる部分にして、條例に『會友の信仰の進歩をたづぬ可し』と規定しあるが如し、チャールレス、ペロチット氏の組會に左の要點を含有すと云へり

- (一) 社の會員として繼續する者の何人なりや、
- (二) 會員の言行を視察すること、
- (三) 會員の心靈上の有様を尋問する事、
- (四) 彼等の誘惑の何なるか、又彼等の如何にして之に陥りしか、若しくは打勝し乎、
- (五) いまだ教の深き心得なき者に、宗教の初步ををしへ、必要なる

場合に、其公けなる説教にて聽聞せし所に、更らに説明を加へて力つよむる事、

- (六) 彼等の信念、愛心、從遵等を獎勵して、罪を未だ犯さざるに防ぎ、不和のいまだ起らざるに停むること、

ウエズレー以上のことを評して云く、『予の總ての組長が前に示せる注意の要點を熟慮し、而して實行するに、神の賜りたる、凡ての機敏と勇氣とを以てせんことを切に歡告す』と、

組長の苦心と注意とを要するの、會友の信仰の有様を尋問するにあり、此の較もすれば、他人の心事に立入るかの如くに見ゆるを以て、公けに信仰の有様を問ひたづぬるに、其方法を誤るとき、折角語らんとせし者をして緘黙せしめ、内氣の者をして赧耻るませ、急性の者をして憤らしむる事ある可し併しながら、組長の一向ら會員を躓せんことをのみ、

あり、この祈禱會にして組會におらざるもの、司會者一人にて他人の祈禱感話の時間を奪ふ方法の宜しきをえたるものにあらず、組長が會員の經驗を語らしむること、組會に於ける最も大切なる部分にして、條例に『會友の信仰の進歩をたづぬ可し』と規定しあるが如し、チャールレス、ペロネット氏の組會に左の要點を含有すと云へり

- (一) 社の會員として繼續する者の何人なりや、
- (二) 會員の言行を視察すること、
- (三) 會員の心靈上の有様を尋問する事、
- (四) 彼等の誘惑の何なるか、又彼等の如何にして之に陥りしか、若しくは打勝し乎、
- (五) いまだ教の深き心得なき者への宗教の初步ををしへ、必要なる

場合に、其公けなる説教にて聴聞せし所に、更らに説明を加へて力つよむる事、

(六) 彼等の信念、愛心、從違等を獎勵して、罪を未だ犯さざるに防ぎ、不和のいまだ起らざるに停むること、

ウヰズレ以上のことを評して云く、『予の總ての組長が前に示せる注意の要點を熟慮し、而して實行するに、神の賜りたる凡ての機敏と勇氣とを以てせんことを切に警告す』と、

組長の苦心と注意とを要するに、會友の信仰の有様を尋問するにあつ、此の較もすれば他人の心事に立入るかの如くに見ゆるを以て公けに信仰の有様を問ひたづぬるに、其方法を誤るときは、折角語らんとせし者をして緘黙せしめ、内氣の者をして赧耻るませ、急性の者をして憤らしむる事ある可し、併しながら組長一向ら會員を躓せんことをのみ、

恐れ問ふ可きことをもどひ得ずして、只慢然、『どう不是から御感話な  
り、御祈禱なり、何なり御随意に願ひます』にて、不可なり、蓋し組長の  
尋問の漠然として取止め、のなきものならば、幾度び組會を催すとも、互  
に顔を見知りあふのみにて、其信仰上の有様の知るに由なし、去ればに  
や、むかしの組長の下の如き尋問をなせし事ありと云ふ、曰く、『御身の  
私かなる祈禱を捧げ給ふや』『幾度』『御身の我教會の條例を讀み給ふ  
や』『御身の教會總則を瞭解なし給ふや』『御身の之を愛し給ふや』『斷  
食を守らるゝや』と、  
予の今日何の組會にも千篇一律、必らず斯くなす可しと云ふにあらす、  
其問題の撰定の一に組長の見込にあれども、實行しえらるゝ丈の目的  
を定めて要點ある尋問をなさんとを冀望す例へば、『あなたの家拜を  
守り給ふどの朝夕の兩度なる乎、或の朝なるか又夕のみなる乎』『聖書

の御勉強に、聖書の友の日課表により給ふ乎、其れ共何か他のよき方  
法により給ふ乎』『或人の私禱に黙念がよしと云ひ、或人の我れどわ  
が耳に聞ゆる程に發聲するがよしと云へど、御身の經驗なし給ふ所の  
如何に承りたし』など、親切に尋ねなば、其會員の答ふる所によりて、お  
はかたの其信仰の有様をも十分に察知しえらる可し、其うちにて誰れ  
か開流しにならぬ心配の事を語る者あらば、成る可く其席にて譴責が  
ましき事を云はず、他のよき機會を見合せ、其人獨りに面接して諫む可  
し  
組會にて、他の席に於ても然るが如く、餘りに高聲を發して、説教がま  
しく語る可らず、又餘りに低聲にて自語せるが如く、にても不都合なり、  
要の室内の居合せたる者に程よく聞ゆるを以て目安となす可し、  
組長の司會の言葉の平易にして、何人にも解しえられざる可らず、濫り

に漢語や雅言を用ゆる時の「私の學問もなく、辨舌も不調法ゆゑ迎ても人さまの前にて御話の出来ませぬ」と、耻ぢらいて語らざる者出て来る可し、然れども又餘りに鄙しき俗語を用ゆるの例の漢語や雅言を灰めかすと同じことなり、何人にもおのれの尊敬する者に對して、其言語の自ら恭しくなるの人情にして、是れ美の嗜好に合し宗教の觀念にもかなへることなり、

彼の『おんみこころ』又『よき集りを持ちます』などの類の、一、無學か不注意の誤りにて、一、おほかた開港場邊の外國宣教師を日まねしたる雜種語なる可し、

此に又組長の注意す可き他の場合あり、嘗て或所にて盲人の組會を司せれる時、ある者凸字の聖書を指にてさぐり讀み、路加傳二章の三十七節に『この老女の齡およろ八十四歳の發なりしが、殿を離れず、夜も晝も

斷食と祈禱を爲て、神に事ふ』といふ所に至りければ、『コノオンナハ、ヨハビ、ハチジフシサイ……』成る程弱ひ女にても八十四歳長命したの、是れ、全く神の御恵みじや、

ある信者の家に奉公せる一人の下婢の、常に振り假名をたよりに聖書を讀み居けるが、或日のことに、馬太傳十一章の廿一節に至り、太たく感動して悔改の必要を悟り、『私のこれまで御奉公をおろろかにし、御臺とこるの御つとめなどにも、身を入れませんでした、御主人に、相濟みません、聖書に、『早く朝起き、早く麻をき、灰を蒙りて悔改ひ、御坐ります』と云へ、

列坐の會員の組長の顔つき如何を窺ひみて、若し組長自身笑ひ顔して、暗に他の笑を促すこともあらば、左なきだにをかじき堪え切れざる場合のどとて、一度にドット吹き出すべし、故に組長の斯る場合に臨み、宜



しく謹嚴なるべし然るを若し他に先ちて笑ひ以て人の笑を誘はる其  
笑ふ人ころ興もあらめ笑はれたるもの身に取りては如何ばかり心  
外のとたるべき是れ満坐のなかにて嘲弄せられたるなり侮辱せられ  
たるなり然かも我が力だのめる信仰の兄弟姉妹より斯る取扱を受  
くるかと思へば其悲さ無念さやる方もなかる可し  
縦しんべ誤解にもせよ其云ひし所の眞面目なり有りがたき信仰の經  
験なり組長も亦眞面目になりて其經驗あつた他の會友の獎勵となす  
可し而して文字の誤解の如き他の時其人ひとり面會せし節赤面  
せぬやうお注意して説明し置く可し  
或組長は司會の方法甚だ嚴重おして出席者一人のこらす是非と  
も何か一言たりども吐かしめずんべ止まず其狀左ながら借金取の居  
催促の如く又小學校教師が生徒に答を求むるが如し何とか一人の語

るまでの決して『お次ぎの人』と云はず餘りに突々として『サアどう  
ですか』『サアどうですか』と組長の迫立てお遇ひ途方に呉れて絶體  
絶命今や辛じて一方の血路を開き『ソナラ私はどうぞ御祈りだけ  
にて御免を……』をどの一言お打伏し無きものを絞り出すが如く  
苦痛にえ堪へで呻めくが如き祈禱をなす人も出来るべし注意すべき  
となり  
組會を閉づるおは祈禱を以てす可し最初に組長の祈禱せしときおは  
終りの祈禱の他の者に命ずるも可あり而して其主意の首尾よく組會  
を終りし事と更らに次週の組會まで其組員の安全を願ふおある可し  
而して散會前に會員の面前にて其名簿お出席缺席の符號を記し置く  
可し  
組會の單調を避けんがためお時々其司會の方法を變じ或時おは組長

が一人づつ尋問して答へしめ、或時の宿題を出し置くもまた妙なり。譬  
 ば次週の組會ふは「天國」と云へる主意めて開會す可れば、諸君は  
 ろれまで不能く此主意を聖書より信仰により考究せられて語らる  
 可しと預告すべし、然らば會員には此廣告を聞きより常に「天國」と  
 云へる一事の心お留まり之がため案外聖書の研究も出来、一方には又  
 人々の同じ主意にて異なる經驗を聞くとも出来て愉快のことなる可  
 し、又之は決して屢々行ふ可らざることなれども、組長の見込みにて會  
 員の互に躊躇して語り出てざる時直ちに其席にて某君より語られよ  
 ど、銘々に名指すもよし、併し又豫じめ語る可き人を約束し置くも一の  
 方法なり、去れ共此の如き方法の餘程注意せざれば弊害に陥り易し、  
 組會に讚美歌の缺く可らざるの云ふまでもあじ、會の時適當なる歌を  
 間を置き、うたうときは愉快のものなり、會員の感話に相應したる所

あり、其を直ちに感話の後に謠ふ如きは更に一層の興味あること  
 なり、蓋し歌の文句も大切なれども、調子も大なる關係あり、重き鈍き  
 沈みたる調子はよろしからねど、去ればどて軽く急にして浮きたるも  
 わし、組長自身唱歌に不得手ならば、かねて組員のうちに堪能の者を  
 撰み之に調子の音頭をとることを依頼し置くはよし、偶まよき歌なれ  
 ども雅言にして解しがたきものあらば、之を説明して而してのち謠は  
 ぶ大に感動を惹起すものなり、又時々組長より會員に何番の歌をう  
 たうべきやど、人々の好みを尋ぬるも一の變化にして、組會に活氣を興  
 ふるものあり、  
 或人は組會を盛ならしむるため、左の十箇條を擧げたり、曰く、  
 (一) 敬虔深慮ありて、能く動く所の最も善良の人を組長に推撰せよ、  
 (二) 毎月一回組長の祈禱會を催して、神恩を願ひ、且つ司會の方法

めに祈禱することを奨励す可し。

- (十)
- (九)
- (八)
- (七)
- (六)
- (五)
- (四)
- (三)

改良の思付きを語り合ふ可し。

組會の開閉とも能く時間を守る可し。

組會を廢む可らず商人の雨天ありとて其店を閉づることあし、

司會の方法を變ずるはよし、然れども一定の制限を越ゆ可らず、

若き者が其心に受けたる明確なる感動を失ひしめざるやう、其

人を尋ねて汝自身に行くか、左なくば名刺を通じ、他の者に依頼

して汝の將に爲さんと欲する所の事をなさしむべし。

自由に語り合ひて其宜しきをえ、更に亂るゝ事なき時に、其方

法の成功し能ざる所のものを成し遂ぐ可し。

いたづらに虚禮に拘る可からず、

聖靈のバプテスマの數次ならんことを祈禱す可し。

折ふし、特別の主意を定め而して組のうち、特別なる人のた

第十二章 教師と組長

上來論する所によれば、組長の責任甚だ重大にして、教師の難きを獨り組長にのみ負はするが如しと雖も、組長を任命するに、一に教師の權内にあるを見ても、教師の責任亦決して輕しとなさず、又讀者の此書の専ら組長のつとめを論せしにありて、教師の職分を辨せしにあらざるを知らば、教師組長兩つながら其職務の範圍に於て偏重偏輕なきを悟らる可し。

教師の組長の働きを監督し、場合によりて之に勸告せざる可らざるを以て、實行しえらるるだけ組會に出席す可し、而して努めて會友と同席しろの司會の方法などに注意す可し、或る組長の教師の列席する時の必らず席を教師に譲り、教師もまた之を慣例として司會す、然れども斯くては組長の司會の方法の適否を知

るに便りわろし、故に教師の組會に出席せし時に、靜かに組員と同席す可し、若し特に云ふんと欲する所あらば、組員の最後に、若しくは組會の終りし、后ち直ちに云ふ可し、但し組長に向て心づけ度き事あらば、其他の時に於てする方穩當なり、教師の餘りに數次同じ組會に出席す可らず、斯なす時の組長は宛も教師に臨監せらると思ひをなし、不愉快を感せしむべければなり、又他の組會より或る組會に多く出席す可らず、斯くせば、何か教師が其組に依怙の沙汰あるやうにて宜しからず、故に特別の事情なき限り、成る可く順番に各組に出席す可し、教師の組長を助くるに種々の方法あるべしと雖も、其一は教師の組會に出席するを公けに講壇より廣告するにあり、例へば來る火曜日午後七時某氏の家に、教師自ら至りて會員の經驗談を聞き、たき故願く

の組長に其御含みにてと云へば其組長の云ふまでもなし其組員も  
 牧師の出席と聞き成るべく盛會ならしめんと奮發し平常は欠席が  
 の者をも之を機會として誘引せしむることなどあり、  
 牧師の組會の終りに組長の獎勵を贊成し何なり其場合に相應せる感  
 話をなすときおの組長をも勵ますべく會員をも益して組會を助くる  
 ことおほかたならず、  
 牧師の折ふしの講壇より組會の利益と必要とを説教す可し若し牧師  
 にして組會を見ること冷淡を極め更らに重きを置かざるが如き態度  
 あらば如何に組長獨り組會を盛大ならしめんとするも得べからざる  
 なり故に牧師の少なくとも毎安息日に一度の組會おつきて懇切なる  
 廣告にかね簡單なる獎勵をなす可し斯くせば會友の記憶をも喚起し  
 我教會の牧師の組會を輕からず思ふとの念をも抱かしむ可ければな

り、  
 牧師之會友を訪問して其信仰の有様を尋ぬる時などには組會に出席  
 するや否やをも探る可し而して組會の特權と其怠らず出席するの義  
 務なるを勸告す可し偶ま何か組會のことによりて躓き居るものあ  
 るを發見せば出来るだけ其障礙を除却す可し然れども牧師の好んで  
 會友より組長の不平不満の事を聞かんとする様子ある可らず而し  
 て牧師の組長に就きて語るときは親切なる言葉を用ゐる會友の彼を敬  
 愛信任せんことを勸めて組長の勢力を助長するやうつとめざるべか  
 らず、  
 組長の牧師に於けるも亦然かなり如何なる事情ありとも牧師に不利  
 なることを會友の面前に披露し輕蔑の色を表はす可らず這の只牧師  
 一人を傷くるにあらずして其害の及ぶ所の教會其れ自身にあるなる

を知るべし、組長の牧師につぎて語るときに心して尊敬の言葉をつかひ、假染めにも牧師の名を呼び捨てにするが如きことある可らず、是等の甚だ瑣細のごとに似たりと雖も、其人心の影響する所決して輕じとなさず、

組長の組員の安息日に出席して、牧師の説教を聞くの大切なるを論じ、組員の組會に缺席する者あるを憂ふる如く、安息日の禮拜を怠る者あるをも心にどむ可し、別けても晚餐式に缺席する者ありや否やを注意す可し、或組長の晚餐式日前の組會に、殊更ら其組員に勸めて、聖式に與からしめ自らも其安息日に人先きに會堂にいたり、講壇の下に坐しておのが組員の晚餐席に着く者の指圖をしたりといふ、宜べなり、斯る組長にして大に牧師の働きを助け、教會の隆盛を來すことあるや、予の組長の資格の章に於て、その職務に必要なる學問をせざる可らざる

ることを論せしかども、牧師の大に此點に於て組長を教導する所なる可らず、牧師若し書を読み、心靈上に利益せしこともあらば、之を組長にも分與す可し、又他に有益なる書籍を思つかば、之を組長に告げ知らせよ、其が中にも聖書の智識の組長に大切なるを以て、彼等のために特に研究會を設くるも可なり、又其他組長會なるものを開きて、司會の方法、訪問の心得など、萬づ組長の職務にかゝはれる事柄を自由に懇談せしむる時に更らに面白し、

牧師と組長の關係の親密なること斯くの如し、左れば教理につき、傳道につき、彼等の異體同心となりて、かたみに相たすけ、相なぐさめ、水魚も膏ならざる交情を以て、教會のために働く可し、信者の冷淡何かあらん、教會の困難何かあらん、教勢の不振何かあらん、願くは著るきリバイバルの雲、油然として起り、恩化の雨、沛然として各教會の上に降り、

これがため我等牧師の更らに奮起し組長の一層警醒せんことを望む

組長のつとめ 終

明治廿九年八月十八日印刷  
明治廿九年八月十八日發行

著者 山鹿旗之進

神奈川県久良岐郡石川  
仲村千五百五十七番地

發行者 清水俊藏

東京橋區銀座四丁目  
二番地寄留

印刷者 岡平吉

横浜市太田町五丁目  
八十七番地

印刷所 東京印刷株式會社  
濱分社

横浜市太田町六丁目  
九十四番地

發行所 文教館

東京橋區銀座四丁目  
二番地

卷之四

卷之四

卷之四

卷之四

卷之四

卷之四

卷之四

卷之四

卷之四

卷之四

卷之四

卷之四

卷之四

卷之四

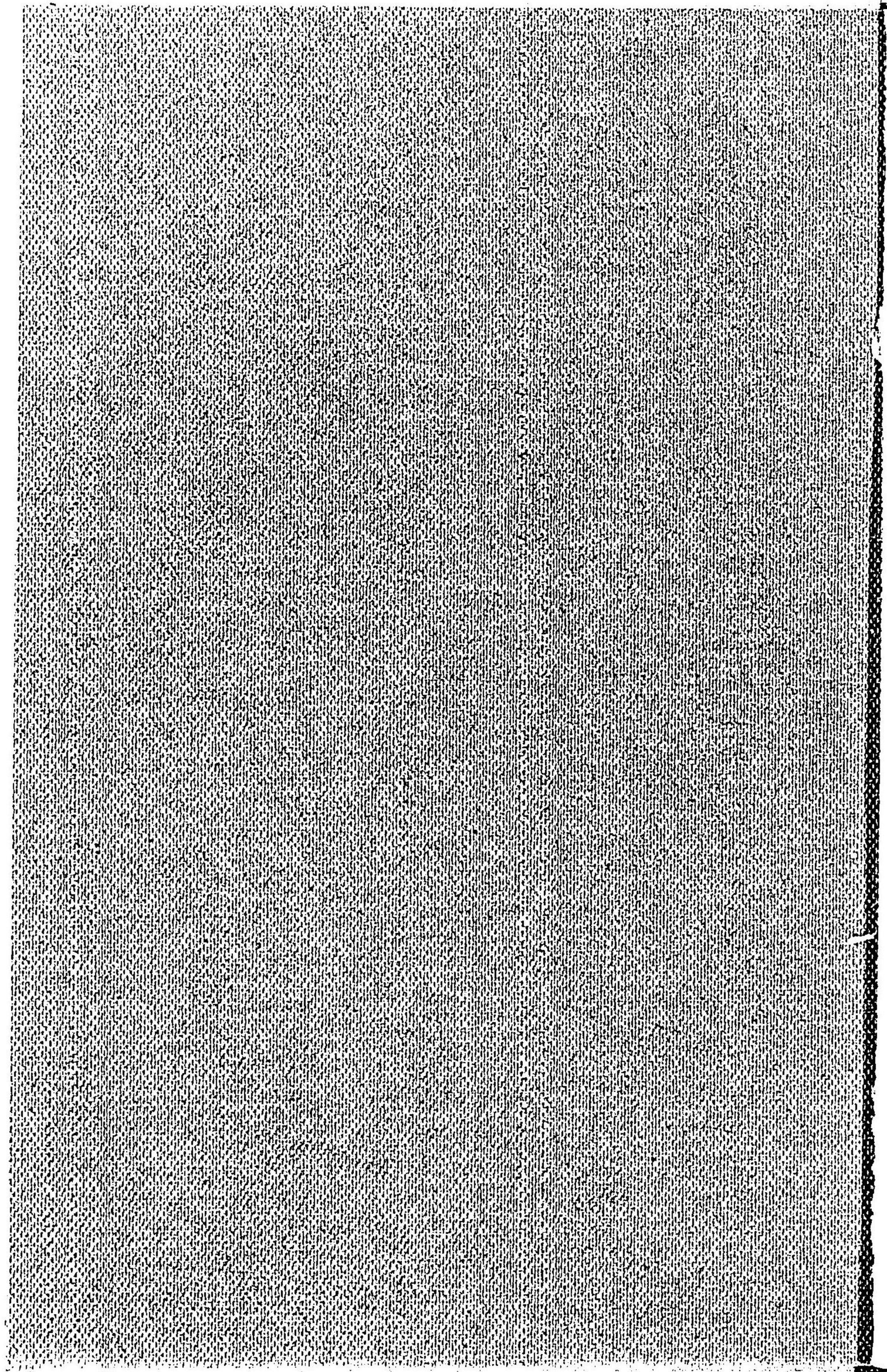
卷之四

卷之四

卷之四







1954

1954

組長のつとめ

国立国会図書館

特21

983

020599-000-5

特21-983

組長のつとめ

山鹿 旗之進/著

M29

ABI-0414



